極悪王子

uzu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
極悪王子

【Ｎコード】
Ｎ９９７４Ｐ

【作者名】
ｕｚｕ

【あらすじ】
１２歳のとき養子として【おとぎ】の世界へやってきた本主人公。義父が亡くなった今、貴族の財産や地位を手に入れ好き放題♪そんな彼が極悪非道に突っ走るストーリー、のはず。＊＊王城で開かれるパーティに呼ばれた一行。ラヴの押しに負けて同行を許可するシキだったが……。＊＊擦れている奴ばっかですが、見ていってください！＊週一、二更新する予定です＊

適当王子

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊

0、適当王子

「人間は文明と共に進化してきた、にもかかわらず俺達は今、テレビもネットも洗濯機もない生活を送っている。これは俗世との隔絶というよりも、進化への拒絶というべきじゃないのか。確かに先代の言っていることも、分かるとも。俺達は仕事柄、俗世間と関わりすぎてはいけない。だから、テレビもネットも、我慢しよう。しかし、しかしだな。これくらいは良いではないか……。先代は俺の至福の時間さえも奪うというのか。否、先代もそこまで無慈悲な方ではない。よって、レン。俺のためにポテトチップスを買ってきてくれ」

「誰が、買いに行くかボケ。もう既に、百文字以上も無駄遣いしたではありませんか。いいですか、小説は初めが肝心なんですよ。初めが面白ければ、自然と続きも読んでもらえる、また逆も然り。そもそも」

「ああー。もう、うるさい。つーかまだ俺等の紹介もされてねーよ。小説だよ、これ。「」ばっかじゃんか」

「わかってますよ。でも、今さらどうするんですか。ここまできちゃったし」

「よし、じゃあ、やり直すか」

「えっ。本当に、やるんですか……」

「物語は竜頭蛇尾。ドーンといこうぜ。そうだな、魔王出すとか」

「ちょっと！　この小説は魔王を倒すとかじゃないでしょ。この駄作者はアクションとか書けないんですよっ」

「あ？　そうだったっけ。まあ、いいや。じゃあーキャラ紹介とか書けば良いのか？　それでお前は満足なのか？　え？」

「なんでちょっと、喧嘩腰？　まあ、良いんじゃないですか、紹介とかで」

「はい。じゃあ。スタート」

$\ast$; $\blacklozenge$

$\blacklozenge$; $\lozenge$

$\lozenge$; $\ast$

.. ..

$\ast$;

$\blacklozenge$;

$\lozenge$;

$\ast$ ..

.. $\ast$

; $\blacklozenge$

; $\lozenge$

; $\ast$

.. ..

$\ast$;

$\blacklozenge$;

$\lozenge$;

$\ast$ ..

.. $\ast$

; $\blacklozenge$

; $\lozenge$

; $\ast$

.. ..

$\ast$;

$\blacklozenge$;

$\lozenge$;

$\ast$ ..

.. $\ast$

; $\blacklozenge$

; $\lozenge$

; $\ast$

.. ..

清純王子

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊

レオ・バローニオは不機嫌だった。せっかく、自分の誕生日パーティだと言うのに、お客の中に気に食わない奴がいるからだ。

本日はレオの二十歳の誕生日ということもあり、母の経営する三ツ星ホテルの大広間と、そのフロアの個室も全て貸しきった。国内の、有名女優や大手社長だって出席している。当然だった。彼の父親は元枢密院議長。レオには約束されたエリート街道が待っている。

レオは、国内最大手の文具メーカーの社長と広告代理店の幹事との会話をそこそこに、例の気に食わない奴を監視することにした。もちろん、後から政治家の父に言いつけるためにだ。気に食わない奴は社会の底辺へ突き落とす。それが彼の趣味だった。いままでそうしてきた人間は数知らないが。絶望に打ちひしがれ、不幸と言う不幸を全身に浴びた人間はそこらの映画館に行くよりもよっぽどリアルで面白かった。この男も同じ道をたどらせるために、レオは顔や声をしっかり覚えておこうと思った。

精々、今のうちに幸せに浸っていろ……。

レオはワイングラスをぎゅっと握った。レオが特に許せなかったのはこのパーティに参加している女性が、奴になびいていることだ。ブロンドに、鋭い相貌。街で女性に声をかけられるのが常なレオにとって彼は初めての好敵手であった。

奴、つまりシキ・エドヴァールとかいうのは金色の長い髪に、深い銀の瞳を持っていた。白い肌は、雪山のようで何者にも犯されないそんな雄大さを持っている。そして、その銀の瞳は見る者全ての心を奪う。なにより目立ちたいからなのか、中世の貴族が着ていたような妙にかしこまった格好が目を引いた。そして、腹が立つことにそれさえも自然に着こなしている。盗み聞きした情報によると、バイオリンからテニス、絵画、芸術分野さえも彼は完璧にこなすらしい。レオは舌打ちしたくなった。

こんな完璧な人間がいるわけないだろうが。レオは、あの男に群がる女共を、張った押してやりたい気分だった。しかも、あの男。自分の自慢を全くしない。全て聞き手にまわって、目立たないところから話を盛り上げている。自分へのプライベートな質問にはオブラートに簡潔に答えるのみ。なるほど、モテる男は違うねえ、とレオは苦々しい思いで言った。

父さんに言うのは、後でもいい。今はアイツにお灸を添えること

の方が先だな。レオはワイングラスを丸テーブルに置き、女をかき分けシキの元まで行った。

「やあ。今日は僕のためにご出席ありがとう」

レオはそう言うとシキに手を差し出した。シキはニッコリと笑い、それに応えた。ただそれだけのことなのに、シキの周囲から薔薇が一気に咲き誇るような、強烈な勢いをレオは感じた。レオは焦りを感じながらも、こういう男に限って臆病なんだよ、と呪文のように心で唱えて自分を落ち着かせた。レオは続けた。

「少々、お話がしたいのですが……どうですか、ご一緒に庭でも？　案内しますよ」

そこで、お前をボッコボコにしてやるよ。レオは心の中で舌なめずりした。実はこの手、初めてではないのだ。問題ない。確かにシキは顔が良い、しかし見たことも聞いたこともない名前。間違いなく身分はレオよりも低い、つまり俺に逆らえるわけがない。喧嘩なんて野蛮なことはしない。ただ少々、恥をかいてもらうだけである。レオの脳内プランは完成していた。1、まずはコイツを殴る。2、酒をぶっ掛ける。3、俺がこいつに殴られたと叫ぶ。4、ちょっと署までご同行できますか。以上だ。身分が低い彼がいくら無実を証言しても、そんな言葉は霧の中に永遠に消える。

「本当ですか。では、お言葉に甘えさせていただきます。それで

は、またお会いしましょう、レディ」

そういってシキは、周りの女性に笑顔で一礼した。中には『シキ（王子様）を私達から取った！』と言わんばかりにレオを睨んでくる女もいた。

お前、このパーティの趣旨分かってんのか、とレオは思わず言いたくなった。

レオとシキは、白薔薇の咲いた夜の庭を歩いた。庭にもいくつかのテーブルが置かれていたが、ほとんどの人は空調の利いた室内にいて、ガーデンにいるのはパーティに飽き飽きした小さな子供達が駆け回っているだけだった。しかし、念には念を。シキの悲鳴が聞こえたりすると不味いので、レオはシキを奥へ奥へと誘(いざな)った。

「素晴らしいですね。うちにも庭師はいますが、このような綺麗な白薔薇を咲かせたことはありません」

シキは目を輝かせながら庭を褒めた。この庭は簡易な迷路のようになっている。複雑なものではない。小さな子供でもすぐ飽きるくらいだ。その迷路の壁を作っているのがこの白薔薇だ。二メートルちょっと伸びた白薔薇の壁は、確かに壮観だった。

当然だ。お前の三流と一緒にするな。レオは毒づいた。

「ありがとうございます。母にそう伝えておきますね。ああ、そうだ。シキさん、少々目を瞑ってくださいますか」

「こうですか？」

シキはレオに背を向け、目を瞑った。金色の髪が月明かりに照らされる、その美しさを見てレオの怒りは益々募る。

「あと、三十秒ほど我慢してくださいね」

レオは忍び足でシキの後方に近づいた。悪いね、ちょっと後頭部を殴って気絶してもらう。それから、酒を浴びさせ酒乱を装わせる。女共、いや、皆の前で醜態を晒せばいい。

「あ、もしかしてイルミネーションですか？　これだけ広い庭ならとても綺麗でしょうね」

「ええ」

だから、お前が殴られるところは誰にも見えないし、悲鳴さえもパーティ会場には聞こえないけどな。レオは護身用にもっている警棒を握った。そして、それを振り上げた。その瞬間だった。

「！」

振り上げたはずの警棒に手ごたえがない。レオはすぐに警棒の先を確認しようとした。しかし、その一瞬で完了するはずの動作の前に、腹部に鋭い蹴りが入る。うめき声もそこそこに、次は背中にもう一本の足からの蹴り。間髪いれずにレオの両手は相手の片手で封じられ、もう片方の手はレオの髪の毛をギュッと掴んだ。全てがほんの瞬きのうちで完了し、完結してしまった。レオはそこでようやく、この鬼神の如き動きの正体を知ることとなる。やはり、というか、一人しかいないが、あの男だった。シキは驚きで目を大きく見開かせながら、レオに顔を近づけた。

「すみません、レオ様。嫌な気配がして反射的に……。お怪我はありませんか？」

畜生、喧嘩も強いってかっ。レオは腹と背中、どちらを擦るべきか考えながらも、心中でそう吐き捨てた。まあ、いい。ここは撤収だ。この馬鹿は俺の行動を意図的とは思っていないらしい。ならば好都合。適当な理由をつけて、それっぽく誤魔化そう。

「いえ、僕の方こそ驚かせてすみません。実はあちらの物陰に怪しげな――――――」

「俺を大衆の前で醜態をさらさせたかった。だろ？」

「へ……？」

返ってきた言葉は、凍りつく言葉だった。背筋がしゃんとなり、全身の毛穴から嫌な汗が噴き出してくる。まさか、このパターンはないよな。うん、大丈夫だ。ない、それは、ない。レオは必死で現状を処理しようとした。しかし、なかなか飲み込めない。というか飲み込みたくない。

あの言葉は間違いなく、目の前にいる男から発せられたものだ。と、いうことは……？

シキは、レオの髪の毛を掴んだまま、一向に離そうとしない。それどころか、シキは笑っていた。というより嗤(わら)っていた。

「何か理由が、あったんですね。なるほど、そうですか」

という割には髪の毛を掴んだ手の力を全く緩めない。レオはもう涙目だった。脳の中のすごく本能的なところが助けを求めているのをびしびしとレオは感じ取れる。体だけでなく、内臓も凍りつきそうな勢いでそれはレオの体を蝕んだ。シキはニッコリと笑ったまま、ワントーン音を下げ、レオに囁いた。

「理由はあの世で聞いてやるよ。……三下がっ」

喉が震えて、嗚咽が出る。全身もいつの間にか震えだしていた。

何なんだ、この男は！！　レオが心中でそう叫ぶと、シキは元の軽いトーンで爽やかに言った。

「あ、復讐とか考えたら、君の家ごと潰すから。僕の家はね、君とは違う次元にあるわけ。でも、まっお互い仲良くしとこーね、レオくん♪」

そういってシキは手を離し、何事もなかったかのようにパーティ会場へ戻ろうとした。豪雨が嘘の様にやんだ。唐突に訪れた楽園に驚き、思わず唇から言葉が零れた。

「た、助かった」

いや、そうじゃないだろう！！

このままでは、俺のプライドが許さない。レオは最後の気力と、体内の貴族としてのプライドを総動員し、何とか言った。

「い、良い奴キャラは、もうしないのか！？」

シキは振り向いた。自然と、レオの表情が引きつり、後悔が胸に充満していく。シキの顔には先ほどまで見せなかった、幼い子供のような笑みが溢れていた。長い影が、レオの顔を覆う。銀の瞳は、いかにも愉快そうにレオを見つめた。

「何言ってんだよ。良い奴キャラじゃない。俺は、良い奴だ」

そう一言言って、シキは踵を返し、レオを一人暗闇へと残していった。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊

シキ・エドヴァールは眉目秀麗、頭脳明晰、尚且つ温厚篤実な人間だと思われている。しかし、実際は眉目秀麗、頭脳明晰、尚且つ極悪非道な人間だった。

「いやいや、それは言いすぎだ。訴えるぞ」

シキはパーティが開かれている広間から何気なく脱出し、人気の

ない廊下へ歩を進めた。女の取り巻きは面倒だったが、シキの口八兆にかかればそれを撒くくらい容易いことだった。長い廊下にはワインレッドの絨毯と、高価そうな絵画がこれでもか、と飾られている。その見栄はいつかこのホテルを滅ぼすな、とシキは何となく思った。ま、潰れよーが関係ないけど。

「でてきていいぞ、レン」

廊下の角から人影が現れた。高い背丈に、さらりとした黒い髪。古い無声映画に出てきそうな黒い執事服を着ている。歳は二十歳で顔だけは品行の良さそうな奴、それがレン・クラックソンだった。

「全く、どこで油を売っているのかと思ったら、喧嘩ですか。坊ちゃん？」

レンはあくまでもシキの従者なのでパーティに参加できず、ずっと廊下に待機していた。シキはむっとした表情で応えた。

「その呼び方はやめろ。それと、喧嘩したんじゃない。素行の悪い餓鬼への教育だ」

主の方が年下ですよ、とレンは笑いながら言った。シキは無視した。

「それより、バローニオはどうした？　ここが集合場所だろ、もう約束の時間だぞ」

「神経質な方ですからね。こういう悩みを抱えているということを、周りにばれたくないのでしょう」

「かといって、誕生日パーティで密談を申し込むか？　息子の誕生日だろ」

家族は大事にすべきだ。まあ息子がアレじゃあ家庭も上手くはいってないだろうが。

「わざわざ、密談の場を設けるよりも、このような場で偶然を装った方が安全に話せますからね」

「面倒な奴だ」

シキは、近くにある階段の手すりに体重を傾けた。すると、下の方から階段を上がってくる足音がした。シキは立ち上がり、階段の下を見やる。

「やあ、バローニオ卿」

シキは子供っぽく笑うと、ヒラヒラと手を振った。バローニオは

六十前後で、かなりの肥満体型だった。会場の空調はちょうどいいはずだが、汗っかきなのかハンカチを出してはしまって、を繰り返している。

「君がエドヴァードさん……かい？」

バローニオは驚いていた。バローニオは親しい先輩であるトーマスから彼等を紹介してもらった。トーマスも十年ほど前に同じような経験をして彼等に助けてもらったらしい。だから自分も信用して彼等を呼んだ。事前調査とやらで書類を送ったが、担当者と顔を合わせたことはない。しかしトーマスいわく、たいそう高貴な方と聞いたので、バローニオは自分なりに覚悟をして、いつもはしない香水もつけてきた。それが、こんな青臭い子供だった。

「ああ、ビックリしているようだな。先代は三年前に亡くなった。現当主は俺だ」シキは、年配相手に一切敬語を使わなかった。自慢げではなく、淡々とした口調だった。「こんなところで立ち話もなんだから、どっか部屋に入れてはもらえないか？」

「いや、それ私のセリフ……」

シキはその弱者の声を切り捨てた。シキとレンはバローニオに案内されて、個室に通された。もちろん三人以外はいない。この部屋も廊下同様、嫌味たっぷりに鎧やトナカイの剥製が置かれてあった。シキはバローニオの向かいに座った。従者であるレンはシキの後ろに影の様に立つ。シキは革張りの椅子にふんぞり返り言った。

「いきなりだが、あんたはこういう仕事について、どう思ってるんだ？」

シキはバローニオが慣れない手つきで出した紅茶に砂糖を溶かしながら言った。どうでもいい情報だが、シキは甘党だ。

バローニオは少し困った顔をした。この質問に対する答えを迷っているのではなく、敬語で答えるべきか否かを考えているようにシキは見えた。年配としてここは相手の注意をし、シキに対し敬語を使わないというのが一番理想的。だが、シキの威圧的な態度と、この世のものと思えない人形のような美貌が何ともバローニオの感覚を鈍らせ、正反対の行動を取らせた。

「私も、これまでそのような、非科学的なものは信じておりませんでしたが……。もう、ここまできたら、【そのようなもの】の仕業としか言いようが」

「なるほどねえ。それで行き着いた結論が【悪魔】か」

シキは紅茶を口に含んだ。不味い、と思った。

「そ、そのようなものを専門に扱っているのが、貴殿の家系だとトーマスさんからお聞きして」

バローニオはハンカチで額を拭いた。この歳にもなって悪魔だとか言っている自分に情けなさを感じているのかもしれないな、とシキは考察した。その気持ちは分からなくもなかった。シキだって普通の人間だ。

「俺らは【おとぎばなし】の住民。まあ、かっこつけた言い方だがな。で、代々うちが【おとぎ】とこっちの世界との仲介をしているわけ。……しかし、俺が言うのも変だが【悪魔】なら教会とかで取り払ってもらえばいいんじゃないか？」

シキの家系、つまりエドヴァールはこういうことのプロフェッショナルだ。そこらの教会のエクソシストとエドヴァールの比較を分かりやすく喩えれば、少年誌と強化硝子くらい違う。いや、少年誌もなかなか硬かったかな？　まあ、いいや。とにかく、教会で悪魔は払えないこともないのだ。しかし、バローニオは諦めた様な怒ったような口調で言った。

「やってもらいましたよ。でも、ポルターガイストも消えないし、株が大暴落するし、もう家庭も目茶目茶です……。挙句、世界最高峰といわれるエクソシストはハワイ旅行が当たったとか言って、一ヶ月以上逃亡中です。自分じゃどうにもできないとわかって逃亡したに違いありません。もう、どうしたらいいのか」

シキはそんな懇願にも動ぜず、ふーんとだけ能天気に応えた。実

際、誰が不幸になろうとも彼には関係ない。この冬の雨のように冷たい考え方が極悪非道たる彼の所以だ。

「大変そうだな。で、姿は見たのか？」

バローニオは首を横に振った。今までシキの後ろに立って黙っていたレンが口を開いた。

「普通の一般の方は見えませんからね。それに見えないほうが良いですよ。免疫がないと、夢に出てきてうなされますから」

シキとレンは【悪魔】を見ることができる。霊感が強い人間が見ることも少なくはない。レンの言葉はどこか切ない声色だった。レンは悪魔の姿に少々トラウマがあるのだ。

「そうか……。それが唯一の救いだな」

と力なさげにバローニオは答えた。とても喜んでいるようには見えなかった

「じゃ、早速狩るか。大広間は準備してあるな」

シキは、無気力そうにそういった。何事にもシキはあまり張り切らないタイプだ。しかし、その無味な言葉でもバローニオの表情に一筋の光がさした。

「もちろんです。そこで、悪魔退治をするんですか？」

シキは紅茶にはもう手をつけず、高そうな茶菓子をパクパクと食べながら頷いた。

「ライターと、あと赤外線スコープを俺と、コイツの分。それとチョコレート。あ、チョコは高い奴じゃないとダメだから。ハニーロリポップのが良いね。用意してって伝えたと思うけど、あるの？」

シキは申し訳そうな顔一つせず、一気にそう捲くし立てた。もちろん、ハニーロリポップのチョコレートは悪魔退治と何の関係もなく、ただシキが食べたいだけだ。

「すべて、広間に用意してあります。しかし、魔法とかそういうのを使うのではないんですか？」

バローニオがトーマスから聞いた話だと、魔法を使って一瞬で【悪魔】を退治したと聞いた。もちろん、半信半疑だったがトーマスはそんな冗談をいうタイプでないので信じたのだ。だからバローニオはてっきり魔法を使うものと思っていたし、赤外線スコープの必要性もわからなかった。

「ああ、魔法？　使うとも、もちろん。何たって俺は【おとぎ】で知らない人がいないといわれるほどの、第一級魔法使いだからな。父は偉大なる、ザレゴート王国の王。つまり俺は異世界の王子だぞ」

シキはそう自慢げに言い放って、椅子からぴょんと下りるとそのまま部屋を出た。その堂々とした宣言のようなものに圧倒されたのか、バローニオは無意識に頭を下げてしまった。レンはバローニオに一礼してから後に続いた。廊下にでると、レンはバローニオに聞こえないよう小声で言った。

「いいんですか。あのようなことを言って」

レンは少し怒っていた。ザレゴート王国も、第一級魔法使いも大嘘である。シキは軽く笑った。

「王子だよ。王子。まあ、ザレゴート王国の王子じゃなくて、ハッタリ国の、はったり王子だけどな」

シキはいたずらっぽく微笑んだ。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：

；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：

＊◆◇

清純王子（後書き）

カントリーマームのマームって何だろう
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

大広間はシキとレンの二人きりだ。表上この広間は、パーティと同じフロアにあり、騒ぎ声が聞こえるといけないからとバローニオが気を遣って貸しきった、ということになっている。もちろん、実際は悪魔の狩場として使用するのが目的だ。だから、テーブルも椅子もないので、がらんとしている。この広間は今までシキが見てきた部屋とはデザイナーが違うのか、ここには装飾が少ない。天井には天使達が微笑んでいる絵が描かれているだけだ。

なかなか、いいデザインだ、とシキは思った。天使とか神様とかは嫌いだけど、そう呟きながらシキはレンに言った。

「よし、レン。電気を消せ」

「了解」

レンとシキは赤外線スコープをつけた。ゴーグル式で迷彩柄のゴムのどこにでもある、スコープだ。レンが電気を消す。もちろんスコープをつけた二人は広間の中が良く見える。

「で、主。魔法も使えないのに、どう悪魔を退治するおつもり何ですか」

先ほどのことを引きずってか、レンはどこか怒っているような言い方だった。シキは無愛想に言った。

「お前だって使えないだろ」

エドヴァールは【おとぎ】とこちらの世界の平和を守るため、代々魔力を引き継いでいる。しかし、シキはそれを受け継いでいない。というか、シキはエドヴァール家の人間ではない。その辺は結構面倒なので、またいつか説明することとする。レンは眉間に皺を寄せる。

「失礼な。ちょっとは使えます」

代々エドヴァール家に仕えるクラックソン家もほんの少し魔力を継いでいる。その末裔であるレンにも、もちろん魔力はある。シキは魔力がないことに劣等感を抱いたことはなかったが、この世界では何かと魔力がないと馬鹿にされる。だからシキに魔力がないこと

はごく少数の人間（じゅうみん）にしか知られていない。

「ちょっとだろ。大丈夫だよ、心配いらない」

シキはそう言うと、ライターを取り出し、火をつけた。暗闇の中で小さな炎が揺れる。シキはメモ一つ見ずに、不可思議な呪文のようなものを詠唱し始めた。これは昨日読んだ本に載っていたものだった。タイトルは【呪文で簡単☆悪魔退治】である。胡散臭くはあるが、友人がわざわざもって来てくれた本だったので無下にはできなかったし、魔力のないシキにはこれくらいしかできなかった。複雑な呪文だが、シキの暗記力は超がつくほどのスペックを持っていて、一度見聞きしたものならテープを巻き戻すように思い出すことができた。

「何ですか、その詠唱は？」

シキが詠唱を終えると、レンが尋ねた。

「悪魔呼びの呪文だ。古い本に載っていた。本通りなら、（ライターの）火が消える。それが、悪魔がここにきた印だ。これで来なかったら別の呪文でやってみる……」

そう言いかけて、シキは口角を上げた。ライターの炎が大きく揺れる。そして、二人の顔を照らす小さなともし火が消えた。あたり

は暗く音ひとつしない。カーテンだけが不気味に揺れた。

「見ろ、ご来場だ」

「ですね」

密閉された部屋の中、風が吹く。シキ達にはそれが、悪魔の吐息だとすぐにわかった。気持ちが悪いドロドロとした雰囲気に、空気が一気に変わる。広間の奥、シキ達と向き合うように悪魔は現れた。大きな黒い塊だ。象くらいあるかもしれない。やがてその塊は、ゆっくりと回転をはじめ広間の空気を洗濯機の様にかき回した。シキ達はその風のせいで思わず目を瞑った。風がやみ目を開くと黒い塊は大きな虎のような、不恰好な四足歩行の動物へ変貌し、観光バスほどの大きさになった。【悪魔】はこちらをジッと観察した。黄色い瞳が二人を捕らえて離さない。

「よかったな、レン。前見たグチャグチャのに変身しなくて」

シキはへらへらと笑った。レンは、嫌なことを思い出した、と青い顔になった。一年前に退治した下級悪魔の変身後を思い出したのだろう。【悪魔】は変身ができる。しかし、魔力が弱いと一定の形を保っているのが困難となり、レンはそのドロドロとした蠢く物体を見て背筋を凍らせていた。

「きちんとした姿があるということは強力みたいですね」

口元を押さえながら、レンはなるだけ平静を努めて言った。気を抜くと倒れそうなくらい顔が白かった。頼りねえな、と思いながらシキは悪魔に呼びかけた。

「おーい。悪魔！！　聞いてるかー！！」

シキの言葉に悪魔は反応したのか、首をシキの方に曲げて見下ろした。シキに恐怖の二文字はない。

「そんなに馴れ馴れしくて大丈夫なんですか？」

「ああ、心配要らない。だってこいつは……」

「あっ、シキさーん！　ようやく仕事終了っすね～」

「……は？」

悪魔がしゃべった。しかも……。

「何か超フレンドリィィィィ！！！？？」

レンはもう何がなんだか分からなくなってきた。

「だって、だって……ええっ！？」

シキは大きくため息をついた。

「心配いらないって言っただろう。だって、俺とこいつは知り合いだからな」

「はい～。簡単に小遣い稼ぎできるって言われまして、のっちゃいましたよ～」

悪魔は、自慢の先輩を語るような口調で話し始めた。

「僕らもお金が何かと入用（いりよう）になる時がありましてね。でも、悪魔ですから【おとぎ】での仕事もせいぜいハロウィンぐらいしか出番がないですし。お金に困っていたんですよ」

「それで俺が協力してやったんだよ」

「協力って……」

レンは金魚のように口をパクパクさせた。先ほどまでのドロドロとした緊迫感は何だったのだ。

「でも、こいつがやったのはポルターガイストくらいだ。株が急落したのは関係ない。それでも、なんだかんだで依頼が俺のところまで来た」

「そこで僕はシキさんに退治されて」

「俺はこいつにバローニオから受け取った金を【おとぎ】の金に両替し、半分を渡す。もちろん後の半分は俺の協力代となる」

「って、なにしてるんですか主！！　事件解決も何も、あんたが犯人じゃないですか！！！」

レンはわめき散らしながら、シキを非難した。ちなみに、許可なく他世界の住民を他世界に連れてくることも法律に反する。シキは詐欺と不法入界をしたことになる。

「もともとバローニオの金は汚れがついてるものばっかだ。それを奪って何が悪い」

シキは両手をヒラヒラさせて、全く反省していない。話に飽きたのか、悪魔が言った。

「あのー。もう帰ってもいいですかね？」

「ん、ああいいぞ。金は郵送で送るから」

悪魔は助かりますー、と部活の後輩みたいな台詞を言って透けるように消えてしまった。レンは釈然としない気持ちだった。一方のシキは予定通り物事が進み、めずらしく機嫌がよかった。

「さーて。依頼終了。金貰いに行くか。今回はなかなか高かったし、楽しみだ。あっ、でもトーマスの分を引くから微妙だな、あとハワイ旅行代もだな」

ぶつぶつぶつぶつとシキは続けた。どうやらレンの姿は目に入っていないらしい。レンは怒ればいいのか、呆れればいのかよくわからず、しばらく固まっていた。シキは金が無事入ったことで浮かれているのか、独白は続く。

「トーマスもたまには良い儲け話持ってくるじゃないか。もっかい、やろうかな」

レンは心に決めた。

よし、聞かなかったことにしよう。

◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊

冷酷王子（後書き）

生活活動の活活が何か気に食わない
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

忙殺王子

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

エドヴァール家は、ヨーロッパのとある森の中にある。

それこそ“もりのくまさん”に出てきそうなくらい、森しかない。その中に、異様な雰囲気を出す豪邸が建っている。そこがエドヴァール家だ。

この家には現代文明とも言えるものがとても少ない。【おとぎ】と世界をつなぐという仕事柄、どちらに染まることもできないのだ。例えば、料理に魔法を使うこととか、料理にガスを使うこととかだ。どちらもできないので、エドヴァール家の人間はどちらの世界にも存在するマッチを使って火をつける。電気はあるが、それこそエジソンが作ったくらいのレベルなのですぐ取替えが必要だった。ネットもテレビも、冷蔵庫もない。もちろんシキは携帯も持ってはいない。服装だって、ジーンズはもちろんTシャツだってない。いつも堅苦しい、古い貴族の服である。電話はあるが、電話線がもろく繋がらないことの方が多い。そんな彼の情報源は街で小さな新聞屋を

営むイソヤマさんが毎朝片道二時間をかけて持ってきてくれる新聞だけである。

「まあ、ようするに超不便ってことだ」

シキ・エドヴァールは小さくそう言うと、コーヒーを飲んだ。シキは自宅のリビングルームにいた。緑の絨毯に赤いソファ。よけいな装飾をシキは嫌うが、先代の集めたコレクションのため捨てずにいる絵画や陶器が綺麗に整列している。うららかな昼下がり。いつもなら、このソファの上でうたた寝をして、レンに起こされるというのが通例のパターンなのだが今日は違った。

「シキさん、今度はチェスにいたしましょう！　私、負けたことございませんの？」

シキは全身全霊を込めて作り笑いを作る。大丈夫、不自然ではないはずだ、と自分に言い聞かせながら。

「いいですとも、セリルさん。僕も負けませんよ」

セリル・グーデルセン。シキの義理母の弟の嫁ぎ先の嫁の妹の子供。ようするに遠い親戚である。ブロンドに、大きな緑の瞳。小動物のようにすぐ大きな笑い声を上げる。要するに普通の女の子である。歳はシキと同じ十七だが、セリルはどうにも子供っぽく見えた。

だからこそ読めない。行動が奇妙奇天烈、猪突猛進。悪意のない我儘が多い。それが女の子と言えばそれまでだが、どれにせよ、シキの嫌いなタイプだった。そして何より、セリルはシキに並々ならぬ好意を抱いていることがシキには迷惑極まりなかった。

去年のバレンタインにセリルは特大のチョコレートを送ってきた。もちろん【おとぎ】も普通の世界も関わらず、シキの元には殺人的な量のチョコが届いた。チョコは好きだが、シキはハニーロリポップというお菓子会社の製品しか好まなかったし、変な薬が入っているかもしれないと思うとチョコを食べるのは自殺行為に近かった。仕方なく、試しにセリルのチョコレートを庭で飼っているケロベロスに食わせたら、三日三晩、雄叫びをやめなかった。だからこそシキはセリルを苦手、というよりも恐怖の対象として捉えている。

「ところでセリルさん。本日はいつ頃お帰りになるのですか？」

頼むから早く帰ってください。僕にはまだたくさんの仕事があります。おねがいします。そのまま、一生来ないで下さい。　そう言いたいのを我慢する。

「心配なさらないで、今日は夕飯を食べてから帰るつもりですの。勝負がつかずに終わる心配は無用ですわ！」

「それはよかった！」

マジですかっ。もうやってられないですよ。ほんと、今この気持ちを表すとしたら、・。・（つ凸ゝ）・。・　こんな感じですよ。そう言いたいのを我慢する。

「レン、チェス盤を持ってきて下さい」

笑顔で振り向き、後ろに突っ立っているレンに声をかける。レンはいつにも増して笑顔で頷くとチェス盤を取りに部屋から出た。

あいつ、俺がこんな目に遭っているにもかかわらず……。

シキは後ろを向いたまま、セリアに見えないようにレンが消えた扉を睨んだ。絶対、俺を見て楽しんでるな。腹が立つが、このお客を無下に扱うわけにはいかない。自分の本性が彼女に露見すれば、とんでもないことになる。すると、扉が勢いよく開き、メイドが入ってきた。

「ぼ、坊ちゃん！　大変です」

入ってきたメイドはひどく汗をかいている、ケイトだった。ケイトはこの屋敷のメイド長である。歳は六十を過ぎているが、目力が強く凛とした雰囲気を身にまとっている。小さいときからシキの世話をしてきたのでシキの本性も当然知っている。シキも小さい時は

よく叱られた、ちょっと怖いお人だったりもする。

そんなケイトが血相を変えて部屋に入ってきたのだ、シキは驚いて目をぱちくりさせた。ケイトは肩で息をしながら答えた。

「食糧倉庫に、何かいます。恐らく人ですわ！」

「何？　分かった行こう」

この屋敷に侵入者。思い当たる節は当然ない。一様、場所としてはここは普通の世界の方になるが、ただの人間はこの屋敷に近づくことは不可能だ。ともすれば、考えられる可能性はひとつ。シキは面倒なことになったと舌打ちしたい気持ちをこらえて、セリアの方に向き直った。

「申し訳ありません、レディ」視線をケイトにやる。「ケイト、この部屋にメイドを全員集めなさい。僕が良いと言うまで部屋から出ないこと、いいね」

ケイトは首を縦に振ると、急いで他のメイドを呼びに行った。セリアは不安そうな顔でシキを見た。

「危険ですわ、シキさん。他の者に任せるほうがいいですわ」

シキは首を横に振った。

「そういうわけにはいきません。この家の男性は僕とレン、庭師と料理人だけですから。心配要りませんよ。もしかしたら、ただの動物かもしれませんし。ちょっと、行ってきますね」

それに、今あんたの目の前から消えられるんだら何にせよ嬉しいしな。

とは言わないでおいた。

シキはセリアを残し、部屋から出て行った。食糧倉庫は地下にあり、その入り口は料理場にある。料理場には、作りかけの鍋や野菜が無造作に置かれていた。そして既にそこには、レンがいた。レンはシキを視界に捕らえると、困ったように両手を上げた。どうやら、侵入者は地下に閉じこもっているらしい。

「あいつ等はどうした？」

庭師と料理人のことである。レンは苦笑いした。

「アレはあっても意味ないですから、余計なことをしないように小屋に閉じ込めておきました」

うちの庭師と料理人は、鶏と犬を足して十引いたくらいの知能があり、下手すれば殺意を抱いてしまうくらいに使える、自慢の馬鹿コンビである。

「よかった。俺が指示する手間が省けたな。で、どうなんだ、下の様子は」

地下へと続く分厚い木の扉がシキ達の足元にある。微かに何かがいる気配がした。先ほどセリアに動物かもしれないとと言ったが、その可能性は低い。外から地下に進入することはできないので、ここにいるのが動物だとしたら、この動物は玄関扉を開ける呪文、もしくはその呪文の破壊をしなければいけない。そんなことできる動物は、【おとぎ】にもとても数が少ないし、この世界の地球上にも宇宙にも存在していない。

「地下はどのくらいの広さなんだ？」

「私を含めて、五人の人間分の食料ですから、人一人、入るスペースがあるかないかくらいだと思います」

「んじゃ、開けたらすぐ見えるな」いろいろ考えても埒が明かない。「よし、開けるぞ」

レンは念のため銃口を扉へ向けた、シキはそれを確認し、扉に手をかけて一気に引いた。レンが叫ぶ。

「両手を挙げて、動くな！！」

「はへ……？」

「「……」」

二人とも絶句した。

中にいたのはとても盗人とは思えない、少女だった。天然パーマなのか栗毛の髪があちこちにクルクルしていて、格好は牧場が似合いそうな赤いワンピース。足には編みこみのブーツを履いている。田舎丸出し、といった少女のいでたちから、すぐに彼女が【おとぎ】の者だということが分かった。

「いや、全然わかんねーよ。誰だよアンタ」

シキとレンが目を丸くしていると、少女はジッとシキを見つめた。

「何……？」

ただ見つめているだけなのに、どこか不安になる目線だった。心を見られているような、今までで会ったことのない種類の神秘さを持っている。次の瞬間、少女は花が咲いたようにニパァっと笑い、地下から這い出てきた。驚きのあまり時間が止まっていたシキとレ

ンがそれにより弾かれるように少女を捕まえるため動こうとする。次の瞬間だった。少女がシキに抱きついてきたのだ。ギュっ、というよりはムギュッと抱きつくというよりは締めるようなアナコンダみたいな抱きつき方だった。

「は？　ちょっ、キツイ。痛い。締まってるから！」

シキが振り払おうともがくが、この少女尋常なく力が強い。レンが口を開けて二人を見ていると、部屋にいたはずのセリアが焦燥した顔で降りてきた。恐らくシキの叫び声を聞いて、いてもたってもいられず部屋を飛び出してきたのだろう。セリアが叫ぶ。

「シキさん、大丈夫ですかっ　ってキャアアアアー！！　シキさんが女に襲われてるわ！！」

「レン！　見ていないで僕を助けてください！！」

シキはいっぱいいっぱいな気持ちではあるが、自分より高貴な人物の前では絶対敬語！　というのは彼の体に染み込んでいる。なので、自然とこう言った言葉が出る。しかし内心は、そうはいかない。畜生、何なんだこの娘っ。シキは何とか逃げようともがくが、やっぱり敵わない。シキの胸に顔を埋めていた少女は、急にシキの方へ顔を向けた。相変わらずこの世で一番幸せそうな顔をしている。

「やっと逢えたね、リト！」

シキの体が途端に硬直した。時が止まったようにカチッと。瞬きさえもせずシキとレンは、ただただ突っ立っていた。呆然とする二人。何とか、レンの唇から言葉が漏れた。

「何故、その名を……」

少女は相変わらず笑っていた。シキは固まったままだ。

「当たり前だよ。ラヴはリトの友達だもん。ずっと捜してたんだ」

シキは体を震わした。泣いているわけでも、笑っているわけでもない。得体の知れないドロドロとしたものが体中に行き渡り、喉へと。自分が黒く染まる。自分が自分でなくなる。そんな魔力を、この名前は持っていた。シキが最も嫌う、自分の名前を。嫌悪し、蔑み、憎悪した。懸命に努力したが、やはり声が震えた。

「俺はお前を知らない。だが」シキは少女の肩に手を置くと少女の目をジッと睨んだ。「俺をその名前で二度と呼ぶな」

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：

;;;;;;:＊◆◇＊:;;;;;;:＊◆◇＊:;;;;;;:＊◆◇＊:;;;;;;:
＊◆◇

シキは、十歳のときにエドヴァールへとやってきた。養子としてではない。

「君は今日から、シキ・エドヴァールとして生きるんだ。その名前は捨てなさい」

「はい」

「いいかい。僕の息子がこの家を継ぐ。しかし、その息子が死んだ。そうしたらこの家はどうなる？」

「なくなります」

「この家には、養子は必要ない。なぜなら、血が繋がっていないと無意味だからだ。魔力を受け継いでいないと、仕事も減る。というか、仕事がこない。それが、どれだけあってはならないことか、分かるね？」

「はい、わかります」

「君は、シキ・エドヴァールになる。今日からではなく、今からだ。その名前は捨てなさい」

「わかりました。名前は捨てます」

裏切り者。僕は世界で一番大切な者たちを裏切る。今頃何をしているだろうか。元気でやっているだろうか。しかし、今の自分にはそんなことを考えることも罪の様に思えた。息をすることが罪の様に思えた。自分で自分を殺したいくらいに、自分に激しい嫌悪を覚えた。それでも死ななかったのは、まだ目的を達成していないからだ。全てはそのために。

自分は人間ではない。僕はもっと残酷で非道な人間にならなくてはいけない。人をこれからたくさん殺さなくてはいけないかもしれない。だとしても歩みを止めるわけにはいかない。必要なのは金だ。必要なのは権力だ。国も揺るがし、世界を動かす、エドヴァールの威光だ。その為だったら、いくらだって僕は僕を殺すことができる。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇

忙殺王子（後書き）

花見団子を一年中食べていたい
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

悪友王子

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

シキは部屋に引っ込んだ。レンは驚いていた。

あんなに怒るとは思わなかったな。怒るというよりは激情に駆られたと言ったほうが良いかもしれない。シキは時には子供の様にふてぶてしい笑顔を見せたりするが、とにかく彼は計算高く、自分をコントロールする術をよく知っている。だからこそ【おとぎ】の人間はシキの本性を知らないのだ。そのシキが、セリアの前で……。

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

「ちょっと、何の話をしているの？　この方は、リトではなくシ

キさんよ」

セリアは少女に近づき、そう言った。少女はキョトンと目を丸くし、とりあえずシキに抱きつくのをやめた。

「……まれ」

シキが何か呟いた。顔を伏せているので表情は見えない。セリアが表情を伺おうとすると、シキは突然顔を上げ、セリアに向かってすごい剣幕でこう言った。

「黙れ！　俺に近づくな！！」

そう言って、シキは自室に引きこもり今に至る。

「さてさて、どうするかなぁ……」

レンはとりあえず、セリアと少女を居間へ通した。先ほどまでシキ達がいた部屋だ。盗人に茶を出すのはどうかとも思ったが、とりあえず茶を出した。疲れた表情でレンはソファに腰をかけて、少女と向き合った。少女はキョロキョロと辺りを見回し、落ち着かない。

「ねえ。この人、大丈夫なの？　さっきから全然動かないよ」

少女は隣のセリアの頬を指で突っついた。やめてください、とレンは一様注意した。セリアは先ほどの王子崩壊（先ほどの回想を参照）を見てからショックなのか一言も口をきかず、ブツブツと『王子様、王子様、王子様』と念仏の様に唱えている。ほんとに大丈夫だろうか。まあ、これで主に付きまとうのをやめるだろうし、良しとするか。

「後で僕がどうにかするから。そんなことより、なぜあの名前を知っていたのですか？」

シキは十歳のときにエドヴァールにやってきた。リトは彼の昔の名前だ。当時レンは十三歳で、その姿を初めてみた時はあまりに似ていたので生まれ変わりとさえ思った。もちろん、仕えていくうちに暴虐非道な姿を見てその考えは一瞬で瓦解した。少女はニコニコしながら答えた。

「わかんないけど、リトに伝えなきゃいけないことがあったの。だからここに来たの」

「つまり、何故その名前を知っているのかは分からないと」嘘臭いことを言う。「他には何か覚えていない？」

「何にも覚えてない。あっ、でも自分の名前と、このお屋敷の入り方はわかったよ」

この屋敷には強力な呪文がかかっている。森に迷い込んだ普通の人間も【おとぎ】の人間も関係なく、勝手に入って来ないようにするためだ。この術にかかった人は、この屋敷がただの泉にしか見えない。一様、エドヴァールのコネクションを使いここ自体が、イギリスの極秘軍用基地として飛行も進入も禁止にはなっているが念には念を入れてはある。自由に出入りできるのは、イソヤマさんなどの特定の人や森に住む動物達だけだ。それを破るわけでもなく、彼女は屋敷に入ってきた。つまり、術を解く暗号を知っていたのだ。

「なるほど。ったく厄介なことになりました。とりあえず、貴方はシキ・エドヴァールの秘密を知っているということは、はっきりしました」

これからどうしたものか、レンは頭を悩ませた。少女はソファの上で足を揺ら揺らさせて遊んでいた。

「あと、伝言があるよ。リトに。私はこのために、ここにやってきた、ような気がする」

伝言……。シキが本物ではないことを知っている人間が、この娘を使ってエドヴァールを脅そうとしているのか？　レンは背筋が凍る思いだった。それは非常にまずい。とんでもないスキャンダルだ。

「だったら早く伝えろ」

扉が開き、シキが入ってきた。先ほどまでの激高はどうやら収まったのか、いつも通りの厚かましい顔である。レンはあまりにも早い復活に驚いた。

「リト！」「主！」「王子様、王子様、王子様……（エンドレス）」

少女は立ち上がり、シキに抱きとこうとする。しかし、同じ轍は踏まない。シキは素早く左腕一本で少女の両腕を拘束した。いつものことながら容赦ない。

「いいから話せ」

「痛い痛い痛いっっ！！　分かったよぉ。もう抱きつかないからー」

シキはパッと手を離した。少女は渋々、伝言を言う。

「

君はまだ何も知らない。

だから僕が教えてあげよう。

日はもう沈んだ。

しかし、誰もそのことを知らない。

全ては決まったんだ。

僕の伝言はここまでだが、このままでは君が僕の存在を信じないかもしれない。

だから僕と君しか知らない、合言葉を言うよ。

【＊＊＊＊＊＊＊＊＊】。

また会おう。

……終わりだよ。これでラヴの知ってることは全部だからね」

「そうか」

シキはそれだけ言うと、ドサッとソファに腰掛けた。シキが発した、落ち着いた、あまりにも淡々とした一言に、レンは拍子抜けした。怒るも、驚くもない。レンにはその合言葉が何のことだか分からなかったが、シキはそれをきちんと理解しているようだった。レンが心配そうにシキを伺う。

「この娘は主と先ほどの合言葉以外何も知らないと言っています。本当に主の知り合いではないんですか？」

「知らん。しかし、今の合言葉は確かに俺しか知らないことだ。お前、名前は？」

少女は太陽のように笑う。

「ラヴだよ。誰かに付けてもらったの！　でも誰だったかは覚えてないの」

シキは溜息を一つ吐き、頭をくしゃくしゃとかいた。

「……そうか。ラヴ、これからどうする？　不法侵入は犯罪だが、とりあえず俺はお前を【騎士団】に突き出す気はない。俺の昔の名前を他の奴等にばらすといったら別だが」

騎士団は【おとぎ】の世界で言うとところの警察だ。レンはシキがラヴを捕まえる気がないと知って慌てた。

「野放しにするつもりなんですか！？」

シキはサバサバした口調で、『構わん』と言った。その顔はどこか諦めたような、何かを喪失したような、暗い表情だった。いつもらしくない。シキはラヴの方を向いた。

「俺はお前に伝言を託した奴に何を言われようと、過去を振り返るつもりはない。だからラヴ、これからはお前の好きにすればいい。消えたければ消えろ」

ラヴは少し考える素振りを見せた。しかし、ものの三秒で彼女は結論を出した。

「私はリトと一緒にいる。ここの野菜は美味しかったからな」

「はあああ！！！　ふざけんなよっ。お前は盗人なの！　しかも理由が野菜かよっ。ちょっと主、良いんですか！？」

シキは相変わらず表情を崩さなかった。どうやら先ほどの出来事で相当憔悴してしまったようだ。よく見ると、額に少し汗がある。

「問題ない。好きにしていい。ただし、俺のことはシキと呼べ」

シキはレンの方に向き直った。「ラヴに部屋をやれ」

「しかしっ」「いいんだ」

シキは遮った。よっぽどこの娘が気になるということか？　レンは首をかしげた。彼女が言った、合言葉はどういう意味だ。シキは十歳のときにここへ来た。それより昔の話はあまり聞かない。とすると、合言葉を伝えた男性（僕といっていたし、たぶん男）とシキはその頃の知り合いだろうか。考えても、考えても疑問は残る。主をあそこまで激高させた過去……。レンはもう一度首をかしげた。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊

一時間後。相変わらずセリアはそのままだが、三人はそれを放って置いて、ラヴを侍女達に『行き倒れの保護』ということで説明した。

『とりあえず、コイツの身元が分かるまでは、家に置くから。働かせてもいいし、煮るなり焼くなりケイト達の好きにしろ』

この一言で、エドヴァール家に新たな家族が増えた。ケイトはそれが嬉しいのか、いつになく笑顔である。シキ達は、すっかり彼女への警戒を解いていた。彼女の幼さがなせる業なのか、レンも彼女に対して悪い気はしないのだが、レンはあまりにもな警戒心のなさに少し呆れ気味だった。

「あんなに簡単に信用するなんて、主らしくありませんよ」

シキはすっかり調子を取り戻し、まるで全てを自分のもの（まあ実際に貴族で偉いんだけど）と言った厚かましい猫のような狡猾でニヤニヤとした表情だ。

「心配無用だ。それに何かあったら直ぐに息の根止めてやるさ」

レンは諦めたのか、溜息を一つ吐くとその件については引き下がった。

「とはいえ、家の手伝いをやらせるんですか。まあ、監禁しておくわけにもいかないんですけど。あの娘。見るからに不器用そうで少々心配なんですが」

「ま、いいんじゃない。家事を手伝うときはメイド服なわけじゃん。ヒロインはメイド服。もしくはゴスロリ。あ、俺の趣味じゃねーからな。俺は純和風が好きだから。黒髪、クリティカルヒットだから。この作品にはたぶん出てこないけど。とりあえず、メイド服。これ、鉄板だし」

「鉄板とか言うな！　ファンタジーだからね、さっきまでのシリアスシーンぶち壊しだよ！！」

「いやー。いきなりシリアスだったでしょ。名前がどうだの養子がどうなのと。ちょっとこの辺で息抜きしなくちゃ。ずっと盛り上がってると読んでる人も疲れるじゃん。あれ？　作風違う？　とか言われたら凹むじゃん」

「お前は誰視点だ、余計なこと言うな！！」

二人がそんなやりとりをしていると、ラヴに夢中だったケイトがシキに向き直った。

「ああ、そういえば、主。今日はお客さんがいらっしゃるそうですね」

「客？　今日は誰ともそんな約束してないぞ」

ケイトはそんなはずがない、と応えた。

「シリウス様が来ると、昨日電話がありました。主にはもう言ってあるともおっしゃっていましたよ」

シキは舌打ちをした。

「ったく、あの馬鹿。また突然来て迷惑かける気だな。今日は忙しいってのに」

「だれが、馬鹿だ。“馬鹿って言う奴の方が馬鹿”っていう格言をお前は知らないのか！？」

シキは『出やがったな、不法侵入』とぼやきながら振り向く。銀色の髪に、兵隊のような汚れた服。シュッとしたシャープな顔立ちで、目の下には紋様のような刺青が彫られていてピエロのようになっている。青年と言うより、少年の方がしっくりくる。そんな幼さの残る少年は二階の窓の桟に立っていた。どうやら窓から入ってきたらしい。いつものことだと、シキとレン、ケイトは半ば諦め顔だった。

なんで、俺の知り合いは非情識な奴ばっかりなんだ……。シキはｏｒｚな気分だった。少年は続けた。

「久しぶりだな、大親友（キラ☆）」

「黙れ、極道者（キル）」

シキはピシャリとそう切り捨てた。こいつが来るとろくなことがない。

「シリウス様。来るときは事前に連絡を下さい。あと、二階の窓から侵入しないで下さい」

途方にくれた声色で、レンが注意した。ここは二階だ。しかし、たかが数メートルの壁くらい、こいつには何の意味もなさない。シリウスは『ごめーん』と言いながら、靴を持って部屋に入ってきた。ラヴが不安そうな顔でシキの服の裾を掴んだ。

「シキ。誰、あの人？」

「シリウス・ハーマー。元グライドルク騎士団最年少名誉騎士。俺と同い年だ」

「元ってことは、今は違うの？」

「ああ。この馬鹿は騎士団を辞職したんだよ。馬鹿だろう。そんで今はお金がない人にお金を貸してあげて、不当な金利で金を巻き上げたりしてる悪い人になったんだよ」

子供に物事を教える大人のように丁寧な口調でシキは言った。

「ふーん」

「違うわ！！」シリウスはシキの顔を指で指した。「てめぇ、なに言ってんだ。俺は悪い奴に金貸してんだからいいんだよ。悪い奴が悪い奴に悪いことしてもいいのっ」

「いや、お前自分で自分のこと悪い奴って言ってるじゃん」

「あっ……」

シリウスは非合法ギルド、つまり暴力団のようなもののスポンサーをしている。もちろん、その行為も違法である。しかし、このスポンサーがいなければ、ギルド同士で対立が起こり結果的に治安の悪化が起こるため、騎士団からは黙認されている。システムとしては、例えばギルドＡがギルドＢの人員にちょっかい出したとする。このときは、まずギルドＡがＢに和解金を提示する。Ｂがそれを呑めば、和解成立。しかし、そうならない時がある。そのときは、ギルドＢが和解金を設定する。そのお金をギルドＡが払わない場合は抗争となる。

スポンサーはお金が出せないギルドＡに金貸しをする仕事である。そしてそのお金を返してもらえるまでは担保としてスポンサーはギルドＡの人間を自分の支配化における。

現在この男は、無数のギルドを支配下に置いている。おそらくその数は【おとぎ】の中で右に出るものはいないはずだ。

「へえー。すごい人なんだね」

尊敬のまなざしで、ラヴはシリウスを見た。

「おい、シキ。誰だあの可愛い子は」

「手ぇ出したら、1．5殺しだから。こいつは……」

シキは言葉に詰まった。説明するのが面倒だな。いっそのこと妹ということにしてしまおうか。などとシキが考えていると、ラヴが言った。

「私は、シキのお嫁さんだよ」

にっこりと笑顔で。あっさりと爽やかに。

◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：
；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：＊◆◇＊：；：；：；：
＊◆◇

悪友王子（後書き）

プロアクティブのＣＭソングが頭から離れなくないＵＺＵです（・－・＊）♪
ご都合主義な展開……
次はもっと頑張ります

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

シキが、間髪いれずにラヴへラリアットを入れようとしたが、ラヴは飄々とそれをかわした。

「何言ってんだ！！　ふざけるな。俺は悪代官か！」

シキは怒りをあらわにそう叫んだ。レンは爽やかに笑いながら『しいて言うなら極悪外道ですよねー』などと言った。シリウスは、軽蔑の眼差しでシキを見た。

「最悪だな、こんな可愛い子を狗にするだなんて」

「違うって言ってるだろ！　突然家に上がりこんできたんだよ、居候なの！！　ラヴ、お前もそういうこと言うなっ」

ラヴは口をすぼめ、駄々をこねる子供のように言った。

「だって、ラヴはシキのこと好きなんだもん」

「別の言い方があるわっ。とにかく、俺はお前を好きじゃない！！」

ラヴはシュンとなって反省したようだが、いまだシキの怒りは消えなかった。

なんで俺の周りはこんな奴ばっかりなんだよ！

だが、怒ったところでこの馬鹿の暴走が止まるとは思えなかった。

「とりあえず、部屋を移す。俺の部屋でいいな。話はそこでだ」

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊

シキの部屋は何にもない。綺麗に整頓された机と、シックな色合いで安そうなベッドのみ。仕方なくソファを他の部屋から持ってきて、シキたちは腰掛けた。当たり前のように笑顔全開のラヴがシキ

の横に座ったが、シキは彼女を止めるのをもう諦めることにした。

「にしても、何にもないな。本当に貴族か？」

シリウスはシキの昔のことを知らない。シキはシリウスを信用していないわけではないが、シキは率先して昔話はしたくなかった。シキは十歳まで、ろくに生きることもできない社会の底辺にいたのだから。

ま、今は関係ないけど。昔は昔、今の俺は世紀の大貴族だから、うん。

「俺の部屋を俺がどうしようが自由だ。いいから早く用件を話せ。どうせまた、仕事を手伝えとかいう話だろ」

「察しがいいな。乗ってくれるのか？」

シキは鼻で笑った。

「馬鹿を言うな。ようはお前の手持ちしだいだ」

「金取るのかよ」

「当たり前だ。メリットのないことと、人に親切にすることはし

ない主義なんだ」

なぜだか自慢げにシキは言った。

「お前らしいよ」シリウスは呆れ顔で毒づいた。「今日の用件はギルド関係の仕事じゃない。俺が昔、勤めていた会社からの依頼でよー。ひでぇ話だよな、もう退職したのにまだこき使うんだぜ。まあ、ともかくとんでもない化け物が騎士団の監視下から逃げ出したらしいんだよ」

魔物退治ってことか。軽く見積もっても五日はかかるな。

あーめんどくさい。チョコ食べたい。何かもう疲れたー。

シキは顔を歪めた。正確に言うなら、魔力のないシキの仕事はエドヴァールという権力を使った情報収集だ。しかし、これはこれでなかなか骨が折れる。

「俺に頼むより、ペンドラゴンに頼んだ方がいいんじゃないかー？」

シキはただ単にこの仕事を面倒そうと思い、冗談交じりに世界一と謳われる騎士の名を出した。シリウスは馬鹿にするなと少し怒っ

た。

「ペンドラゴン氏はお忙しい。そもそも国(エリア)が違うから頼みづらい」

ま、そりゃそうか。

国々は対立こそしていないが、グライドルクは愛国心が強いため、特に他国への敵意が強めだ。しかし、皆が拝める王都（俺は仕事のために今はこっち側にいるが本邸は王都にある）のシキならばグライドルクの人間にも何も言われることはない。

シリウスはニッコリ笑った。

「どうせ暇だろ、公爵殿。」

暇かどうかと言われれば、暇だった。

「で、どんな化け物なんだよ？」

「狐だよ。化け狐。二十年前、グライドルクの旅人が次々殺される事件があったらしい。まあ俺もお前も生まれてなかったから知らないと思うけど。で、その犯人がその狐って分った、騎士団は一年かけて何とかそいつを見つけた。だけどまたそいつが強くってな。それに化け狐は龍とか麒麟みたいに捕獲できない動物なわけ。だか

ら監視してたんだけど、やっぱり強いから逃げられた」

「それを見つけて来いってことか」

ますます、面倒そうだ。聞き込んでもたいした効果が得られそうにもない。

「大変そうだろ？　ギルドの連中も使ってるんだけど、あいつらここが足りないだろ」そう言って自らの頭を指差す。「調査向きじゃないんだよ。それにご身分柄入れないところもあるし。金はちゃんと出すからお願いしますわ」

シキはこの仕事を請けるかどうか迷った。彼が金を出すというなら嘘はないだろう。シキの仕事の中には【おとぎ】の治安を守るということも入っていたが、シキはそんなことどうでもよかった。いつだって自己完結。自分のメリットを常に求め、ローリスクハイリターンしか求めない。それが、シキ・エドヴァールである。そんなシキが動く理由はひとつ。

「金。しっかり準備しとけよ」

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇

「はい、では皆さん。これから、グライドルクに入ろうと思います」

翌日。やる気があるのかないのか、シキはけだるそうな声で【おとぎ】への入り方を知らないと言うラヴに説明し始めた。

ラヴは今日もニコニコ全開である。

「はーい」

「グライドルクは治安がいいから心配要らないと思うが、スリと怪しい商売人には気をつけること」

「はーい」

「食べ物とか、動物とか、怪しいものに釣られるんじゃねーぞ。可愛く見えるものほど、中身は美味しくねぇんだよ。蝦蛄(しゃこ)を見てみろ、見た目は悪いが、旨いじゃん。あれ初めて食べた人ってほんとすごいと思う」

「主。話が変わってます」

シキは何気ない顔で咳払いをひとつした。

「ともかく。心の準備はいいな。いくぞ」

「でも、どこから行くの？」

魔法の絨毯とかなのかと、期待しているような目でラヴは尋ねた。

「残念だが、この小説はそんな魔法的な展開にはならない！　と、言いたいところだが。【おとぎ】とここはあるもので繋がっている。まずはそいつを見つけて捕まえなくてはならない」

「捕まえるって、生き物なの？」

「世界最強の生物。ゴギブリだよ。世界の言葉だと、ランニングチョコレート。かさかさと動く茶色い生物だ」

「それ、知ってる！　気持ちの悪い奴だ」

それをゴキブリが聞いたらどう思うんだろうか、と考えながらも、頷いた。不細工が不細工と呼ばれるのは仕方のないことだ。

「ゴキブリはもともと【おとぎ】の生物だったんだけどな。はるか昔に、どっかの大魔術師がゴキブリに世界と【おとぎ】を結ぶ移動魔法がかけて、いつでもこっちと行き来できるようにって世界中に散布されたんだと。だから、例え世界は滅亡してもゴキブリは【

おとぎ】のものだから、たぶん絶滅しないだろうな」

「へぇ。じゃあ、ゴキブリを捕まえればいいの？」

「そういうことだ」

シキは立ち上がり、床に何か置いた。ピンク色できつい匂いを発している石鹸みたいなものだ。甘ったるい匂いが鼻孔に突き刺さり、ラヴは顔をしかめた。

「これで呼び出すの？」

「ああ、すぐに来るぞ」

シキの言う通り、本当にすぐに来た。この屋敷は三人のメイドによって病的なまでにとても綺麗な状態を保っているが、やはり森の中、ゴキブリくらい出る。ゴキブリは何も知らない魚の様にえさに食いついた。シキはそれを見て笑むと、その上に硝子のビンをかぶせた。ゴキブリは『！？』な感じでビンの中を右往左往するが、既に漁師の手の中。ビンの蓋をシキが閉じて、彼はあっけなく捕まった。

「――――――――――――――――！！」

ゴキブリがこちらに触覚を揺らし必死な感じで何かを言っている。

しかし、声が小さくて聞き取れない。

「あ？　聞こえねぇよ。魔力があるんだから音量調整ぐらいできるだろ」

シキがそう言うとゴキブリは、はたと動きを止め、思い出したように大きな声で言った。

「こんな手荒な真似をなさるなんて！」

「当然だ。ゴキブリにはこの家の魔法が利かないから入って来れたんだろうけど、うちの食材に手ぇ出したんだ。その分は働け」

ゴキブリは、触覚をうなだらせた。

「わかりましたよ。けど、お願いですから、潰さないで下さいよ」

「わかってるよ」

シキはゴキブリを瓶から出してそっと床に置いた。ゴキブリは逃げずにそこに留まった。

「ここからどうするの？」

「こいつを中心にして、円を描くように手をつなげ」

シキは、ラヴとレンの手を握った。それに習い、ラヴはレンの手を握る。レンがラヴに忠告した。

「ラヴ、絶対に手を離しちゃダメですよ」

「うん。わかった」

ラヴは全く信用ならないフワフワとした返答をした。レンは『ホントに大丈夫かな』ともらした。

ゴキブリは言った。

「じゃあ、いっきまーす！」

ゴキブリの周りに紫の魔方陣が現れる。そこから冷たい風が吹いてきて、シキ達の髪の毛を揺らした。魔方陣はシキ達の足元まで広がり、風は益々強くなる。しばらくすると、魔方陣は発光をはじめ、それがやむと黒い穴が目下に広がった。もちろん、重力に逆らうことなく、三人とゴキブリは落下していく。

ラヴの叫び声が左耳から聞こえ、シキはラヴの口を抑えたかった

が、手を離すわけにはいかないので頭突きをしてしばらく黙らせた。あたりは暗闇に包まれているが、自分達がウォータースライダーのように滑り台方式で落ちていくのが分かる。何度も来た道だが、慣れることはない。ラヴがあそこまで叫ぶのも分からないでもなかった。真っ暗闇の中、レンの声が反響しながら聞こえてきた。

「主、そろそろですよ。受身の準備を」

「分かった」

そう言って、それぞれ手を離し、衝撃に備えようとした。シキは気絶しているラヴをお姫様抱っこするように担いだ。彼女が今起きていたらたいそう喜びそうだが、彼女は現在硬く目を閉ざしている。レンがカウントダウンする。

「3、2、1！！」

途端に、長かった暗闇ウォータースライダー（水なし）が終わった。そして三人とゴキブリは、枯葉が敷き詰められた大きな洞窟のようなところに放り出された。レンは慣れたもので、三メートルほどの高さから、余裕の表情で着地した。ラヴを担いでいたシキは、ラヴを地面に接触させないようにと気を遣いすぎ、腰から落ちていった。

「痛っ～！！」

ラヴを自分の膝からどけると、シキは腰をさすった。レンは珍しいものを見たという表情で

「主にも、人並みの優しさがあるのですね……」

と目を見開かせていった。シキの頭に怒筋がはいった。

「……殴るぞ」

シキが怒っていると、ゴキブリが言った。

「じゃあ、僕はここで」「ちょっ、扉探すのてつだ――――」

ゴキブリは光の速さでどこかへ消えた。ゴキブリの仕事はここまでなのだ。

シキは仕方なくラヴを抱きかかえるようにして、頬を叩いた。

「おい、ラヴ。起きろ！！」

ラヴは目を閉じたままだが、唇が少し動いた。

「ピンポンパンポーン。ラヴは王子様のキスじゃないと目覚めませーん」

「ゴートゥヘル！」

シキはラヴの頭にチョップをお見舞いした。しかし、今度は『痛いっ』と言うだけで、結構けろりとした顔だった。

もしかして、こいつさっきわざと気絶したんじゃ……。

「で、こっからどうするの？」

大きな洞窟には、高い所に一つこの場に不釣合いなシャンデリアがあり、それだけがここを照らしている。しかし、よっぽど高い所にあるようで、ここにはわずかな光しか届かない。洞窟には、壊れたソファや見たこともない大きな機械や、とてつもなく大きなスプーンなど、様々な世界の道具が捨てられていた。とりあえず、自分達以外の生物は見受けられない。ここから見える限り扉は１００以上ある。どれも古い木材でできていて、なんとも不気味である。ところどころに大きなはしごがあり、それを使えば高いところにある扉にもいけるだろう。

「看板がついてるだろ。そのなかに唯一読むことができるのが【おとぎ】への看板だ」

扉の上にはそれぞれ石に何かが彫られている。読めない文字ばかりだが、この中に読める文字があるはずだ。

「読めない文字は、どこと繋がってるの？」

「別の世界だよ。俺達が知らない世界。まあ、俺くらいの貴族になると話したことくらいはあるが、許可なしに会いに行くのは規則違反だから、入るんじゃねーぞ」

「はーい」興味深そうに、ラヴは扉を眺めた。「あっ、シキ。あの文字読める！　【おとぎ】って書いてあるよ」

ラヴが見つけたのは、下から三段目の扉だった。八段目とか、十段目とかじゃなくてよかったとシキは胸をなでおろした。扉の位置は、毎回変わる。前回着たときは、七段目でレンとシキどちらが先にはしごに上るかで軽く一時間もめた。

「よし、じゃあ行くぞ」

今にも折れそうなはしごに一人ずつ乗り、先頭のレンが扉の前までいった。レンははしごに乗りながら手を伸ばし扉を開けた。

「じゃあ、お先に」

レンははしごから手を離し、プールに飛び込むように扉の奥へ消えた。すぐにシキもそれに続く。

「えっ、嘘。行くの！？」

ラヴは恐怖に目を潤ませた。しかし、この先にシキがいるのだ。いかないわけにはいかない。彼女のシキへの愛は海よりも深く山よりも高いのだ。

「シキの馬鹿ぁ。ラヴにもっと優しくしろー！」

と投げやりに叫びながら、ラヴも飛び込んだ。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇

財欲王子（後書き）

トマトケチャップってあるけど、トマトじゃないケチャップって何ですか？
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

行動王子

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊

扉の向こうは【おとぎ】の王都と繋がっている。シキたちは、王都の中心部である繁華街に出てきた。広い通りには、馬車が通りレンガ造りの豪華な建物が並び、露店も賑わいを見せている。ここは【おとぎ】の中でも随一の賑わいを見せる流通の場なのである。

「すごい人だね」

キョロキョロと辺りを見回しながら、ラヴはテーマパークへ来た子供のようにはしゃいでいた。露店の行商人が大きな声で必死に商品をアピールし、その隣では猫が喧嘩をしている。人々は目を輝かせてショーウィンドウに飾られた最新式の魔法鍋や流行のフリルのついた魔女服を見たり、紫と金色のアイスを食べ歩いたり人もいる。ラヴは後を見ないので、危うく馬車に轢かれそうになる。

「ねえ、シキ。ここからどうやってグライドルクに行くの？　ま

たゴキブリ？」

だったら嫌だな、とラヴは続けた。シキは首を横に振った。

「いや。ここからは馬車だ。っても馬が引く馬車じゃなくて、魔法で引いてく馬車だから半日もしたら着く」

「魔法の馬車！？」

ラヴは子供のように目をキラキラとさせた。実に単純な思考回路だ。シンデレラの乗るようなかぼちゃの馬車を想像しているのだろう。しかし、そんなに甘くない。それを知っているレンは、露骨に嫌な顔をした。

「嘘ですよね、主。魔法の馬車は緊急時しか使えないんですよ。それに、あの速度は……殺人的です」

魔法の馬車は、魔力を多く使う。その分料金も高いので一般人は手が出せない。一般人が魔法の馬車を使えるのは、白磁の天使という云わば病院に行くときしか使えない。もちろん数が少ないので、怪我をしたときに魔法の馬車が駆けつけるのはごく稀にしかない。普通の世界の言葉で言い換えるとドクターヘリに似ているかもしれない。ただこの馬車、運転が荒いことで有名なのだ。率先して使う人は少ない。

「人気がないから、予約なしでいける。呼べばすぐ来るからな。」

シキは懐から、ネックレスのようなものを取り出した。それを、指でつまんで回し遠心力をつけると思いっきり空へと投げた。重力に反し、それは虚空へ向かって速度を上げていった。やがてそれが見えなくなったかと思うと、青い空に小さな点が見えた。その点はどんどん大きくなってくる。どうやらこちらへ向かっているらしい。それが魔法の馬車である。

「すっごーい！！」

ラヴが大きな声を上げる。周りにいた人たちも同じように馬車を見るが、魔法の馬車だとわかると皆怖がって蜘蛛の子を散らすように逃げていった。猫も、商人もいなくなり、砂塵が舞うのみである。白い翼をもった馬に黒い馬車。馬車にはデスメタルチックなシルバーの装飾をつけてあり。《天国へようこそ》という、洒落のつもりなのか救急車にあってはならない文句が血のりで扉に書かれていた。

相変わらず、趣味が悪い。そりゃ、皆も逃げたくなるだろーよ。

この装飾は王都一の馬鹿と名高い、この馬車を引いているペガサスの趣味であろう。シキはげっそりとした表情でその馬車に目をむけた。レンはシキ以上にやつれた表情だ。これから起きるであろう

惨劇を考えると笑ってはいられないだろう。一方、ラヴは溌剌(はつらつ)とした表情である。ペガサスが、少し訛りのある明るい声で言った。誰もいない通りにその声が異様に響いた。

「やあ、お客さん！　見たところ白磁の天使行きじゃないみたいですね」

「ああ。グライドルクの藍(ブルーリフレックス)の雪原だ。近くの町にでも降ろしてくれ。金はある。頼めるな」

ペガサスは気前の良さそうな営業スマイルを浮かべ頷いた。

「では、お乗りください」

ペガサスは足で二回地面を叩き。扉を開けた。三人でそこに乗り込む。レンが嫌がって逃走を計ろうとしたが、シキが後ろから背中を蹴り、無理矢理押し込めた。

ペガサスも人並みの魔力を持っている。しかし、友好的な性格から愛玩用として人と共に行動することが多い。しかし、魔法の馬車のあまりの不人気さから人間の方はこの仕事をやめてしまったらしい。しかし、空を飛ぶのが好きだからという理由でここに残った、とこのペガサスは以前そう話していた。

「では出発します！」

シキは怯えるレンを見てニタリと微笑んだ。

「何なんですか、その微笑は！？」

八つ当たりするように、レンは涙目で反撃した。

「大の大人がそこまで怖がるとは、良い余興だ」

シキは鼻でそう笑うと、備え付けられている安全ベルトを装着した。ラヴもそれに習う。レンもベルトに手をかけようとした時だった。

「じゃ、出発しまーす　★（（@^ー°@）v」

「えっ。ちょぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

「イヤッホー☆　楽しーい」

「ラヴ、うるさい。レンもっとうるさい。二人とも黙らないと、喉千切るぞ、こら」

馬車が動き始める。空へ急上昇し、すごい速度で空を翔ける。もちろん線路があるわけではないので、上へ下へとよく動く。速度も速いので、内臓一式を取り残して、体だけ動いているような感覚に陥る。髪が揺れて、顔にビシバシとあたり痛い。シキも先ほどは強がって、レンに軽口を叩いたが、そうとう辛い。

き、気分が……。

頭痛がしてくるので額をさすりながら、何とか持ちこたえた。

「うぎゃあああああ！！！！」

一方レンはベルトをつけていないので、天井と顔からぶつかったり、体ごと床に打ち付けられたり。その光景はさながら拷問であった。

さすがに、これは可哀想だな。

シキがそれを見てニッコリ笑っていた。表情と心の声が一致してはいないが、ともかく、彼の心の中のホチキスの初めに出る捨て芯くらいの部分がレンを可哀想だと認めたくらいにその光景は悲痛なものであった。ようやく馬車が止まった。

「到着でーす」

扉が開き、シキたちは外へ出た。レンはヘロヘロだったので、仕

方なくシキが肩を貸した。唯一無傷なラヴが跳ね回りながら叫んだ。

「すっごーい！！」

辺りはもう夜で、大きな星（ミラ）の光とぽつぽつとある住宅や宿の光。それに加えてここには藍の雪原の名に相応しい藍色に光る雪が積もっている。神秘的に光る藍色は道行く人の顔をほんのりと染めていた。その姿は人間と言うよりも妖精のようにも伺えた。この辺りは藍の雪原にくる観光客の宿として賑わっているようだ。宿屋が通りの奥のほうまでひしめいている。奥に見えるたくさんの木々が植えられているところが、藍の雪原なのだろう。

「やっぱり寒いな」

シキは体をぶるっと震わせた。コートは着てきたが、少し薄地すぎたようだ。ともかく今は、もう夜になってしまったし、調査は明日にして今は宿を決めなくてはならない。

「おい、どこか良い宿を知らないか？」

シキはペガサスに尋ねた。ペガサスは器用に翼を使ってシキから受け取った金を数えるのを止めて、ニッコリと笑った。

「でしたら、あの宿がいいですよ。美人な女の子がいるんですよ」

そういってペガサスはすぐ目の前にある宿を指（というか羽）差した。どっしりとしたレンガ造りでだいぶ年季が入っていそうな宿だった。それでも、歴戦の勇者のような威風堂々とした面持ちを見せる宿だ。ちょっとしたテラス席には酒に酔った男達が大きな声で故郷の歌をうたっている。酒を配って回る女性達は清楚で笑顔が眩しい人ばかりである。

「おお、確かに上玉だ」どうでも良さそうな口調でシキは言った。

「そこに決めた」

「でしたら、私が予約を取ってきましょう。ここには顔が利くんでいい部屋を案内させます。さ、こちらへ」

ペガサスは翼で馬車と自分とを繋ぐ紐を解き、斜めがけした皮のポーチに先ほどの金を入れた。宿の扉を開けて、中に入ると酒の匂いが鼻孔を刺激し、旅人や観光客の騒ぎ声が波のように打ち寄せてきた。ホールには十人くらいの人がいて丸テーブルをそれぞれ囲んでいる。その奥に受付のようなところがあり、気だるげな熟女が新聞を片手に煙草をふかしていた。

「やあ、ロビン！　この方僕のお客さんなんだ。飛び切りいいお部屋に案内してよ」

ロビンと呼ばれる熟女は新聞を脇に置くと顔をくしゃりとさせて笑った。なかなか人の良さそうな笑顔だった。

「まあ、お前にお客？　何年ぶりかねえ。もちろん、いいよ。色男なら大歓迎さ」

ロビンは立ち上がると厨房に向かって叫んだ。

「リィリー！　お客だよ。スイートに案内してやりな」

「はい！　今行きます」

若い女の声がすると厨房から赤いエプロンを付けた娘が出てきた。短い髪に利発そうな瞳が印象的で歳は十五、六歳だろう。赤いハイビスカスが似合いそうで、どこか品がある。

「いらっしゃい。私はリィリー・ラード」

シキは無表情なまま顔で出された手を握った。

「シキだ。こっちがレンで、これがラヴだ」

リィリーはお辞儀をすると早速部屋に通してくれた。石造りの階段を三つほど登ると部屋の前に着いた。黒い板張りで家具はベッドと申し訳程度についた机に小窓。シキの家にある書斎の三分の一にも満たない豪華さである。

「これのどのへんが、スイートなんだ」

シキは怒るというよりも、本当に疑問に思った。大理石の美しい部屋を想像していたわけではないが、いくら何でもこの部屋じゃ王都の人間も鼻で笑うだろう。しかし、リィリーは悪びれる素振りも見せず、真面目に答えた。

「この宿は老舗ですけど格調高いわけじゃないんですよ。安くて、旨い。それが売りの宿なんです。なのにこの部屋はダニや虫が出ないように魔法や清掃が完璧に行き届いている。自慢のスイートです」

そうだ、グライドルクの経済は四ヶ国の中で一番発展していないんだった。

シキはうなだれた。だが、仕方がない。これも全て報酬の為。こんなおんぼろホテルに泊まる機会ももうないだろうし、社会見学と思えばいい。なぜ、天下のエドヴァールがこんな貧困者のような真似を……。シキは眉間に皺を寄せながらも、ベッドに腰掛けた。ベッドが嫌な音を立てて軋んだ。

「そうだ。リィリーとか言ったな。俺たちは狐を狩りに来たんだが何か知らないか？」

リィリーは驚いた顔をして、まじまじとシキを見た。その瞳は心なしか潤んで見えた。

「本当！　あの性悪狐を退治してくれるの！？」

やはり、あの狐は藍の雪原にいる。そして騎士団の包囲網をかいくぐり悪さをしているらしい。だとすると、早く事件を収拾しなくてはならない。

「二十年前、騎士団の監視がつく前に旅人を殺していたとは聞いた。やはり、何か事件を起こしているのか？」

リィリーは顔を曇らせた。言いたくない気持ちと狐に対する怒りが見え隠れした。

「あの狐は人を殺すんじゃない。捕食するの。この町の人口も狐の餌になるのを恐れてだいぶ減ったわ。今、この宿にいる人たちも旅人なんかじゃなくて、狐の賞金を狙いに来た男ばっかり。おかげで宿はたたまなくて済んだけど、藍の雪原から生きて帰ってきた人間は狐の屍ではなく、食い荒らされた他の旅人達の死体を見つけて

くるわ。それも、毎日のように。そして、その中に私の、妹もいたの」

リィリーは苦しそうに笑い、厨房に戻ろうとシキたちに背中を見せた。その背中は震えていた。その言葉を聞いてレンは顔を硬直させて、ラヴもビックリした顔をした。シキは顔色こそ変えないが、深く息を吸ってはいた。

「なるほど。人喰いの狐か」

ラヴは八重歯を除かせ、怒りに肩を震わせた。

「許せない！　絶対ラヴが捕まえてやるっ」

「だめですよ、ラヴ。悔しいですが僕らの仕事は狐の居場所を正確に特定することです。保護法を追うとの人間が破るわけにはいきません」

リィリーは振りかえってレンを見た。その目は怒りと涙が混じり見ているだけで、こちらの息が止まりそうになった。

「殺してくれないの！？　保護法？　グライドルク政府は黙認してくれてるのに何でほかの政府や王都は藍の雪原を助けてくれないの！！　彼等の人間を上回る魔力や仲間の復讐を恐れているだけで

しょ！！！」

リィリーは一気にそう捲くし立てると、その場に崩れ落ちた。レンは何もいえなかった。レンの言い分もシキにはよくわかった。彼等のスペックは人間を超える。もしも戦争にまで発展すればこの世界は業火に包まれ消滅する。それに今、政府の上層部は百年前に起きたドラゴンとの戦いの真っ只中に育ってきた人間がほとんどで、誰よりも彼等の恐ろしさと仲間意識の高さを知っている。彼等が動きたくない気持ちも理解できる。

「強いものは弱いものを喰う。俺たちだって鳥の羽をむしりその肉を喰らっている。奴等（とり）が弱いのが悪い。食物連鎖だからな。だから人間が人間よりも強いものに捕食されるのは仕方のないことだ」

リィリーは顔をシキのほうに向けた。爛々と光るその瞳はシキを射抜くように恨みを持った色をしていた。今にも掴みかかってきそうだ。しかし、淡々とシキは続けた。

「だから、俺たちがその狐よりも強かったら、狐が俺らに喰われるのも仕方のないことだ。食物連鎖だからな」

「へ……？」

途端にリィリーの目の色が変わった。太陽は北からのぼります、と言われたような顔だった。ラヴはニッコリと笑い、ベッドの上ではしゃいだ。

「決まり、決まり♪　狐狩り、狐狩り♪」

「ちょっと本気ですか！？　気持ちは分かりますが、法律違反ですよ！　シリウス様にも迷惑がかかるかもしれませんし」

シキは口元をほころばせ、満面の笑みを浮かべた。天使のように微笑んだ悪魔、そんな形容がシキにはぴったりだった。

「要(よう)は、バレなかったらいいんだろ？」

悪魔は嗤う。そして、幕は上がる。

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

行動王子（後書き）

隣の犬によく吠えられる
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

遭遇王子

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

「本当に森へ行くの？　そんな軽装で？」

翌日の早朝。シキ達とリリィーは宿屋の店先にいた。昨晩の青い雪は太陽の下で光を失い、ただの雪になっていた。まだ街の人々は夢を貪り食っている。通りにいるのは痩せた野犬と鼠しか見当たらない。シキ達は森へ行こうとしていた。今現在、狐の情報量はとても少ない。生きて帰ってきた旅人もいるが、野生動物に襲われて帰ってきた者がほとんどで、ろくな情報は得られそうにない。とりあえず狐と直接対決とまではいかなくても、巣や行動範囲を狭めることができたら大した成果だ。

それにチョコレートを買わなきゃいけないしな、早く終わらせないと。

シキは　仕事＜チョコ　という絶対的な信条がある。

「銃はレンが持ってるし、この栗毛は無駄に強いから心配いらないさ」

ラヴの戦闘力は不明だが、あの抱きつき方や馬車に乗ってもピンピンしている所を見るに、多少のことなら切り抜けられるだろう。魔法も物理的な力も【おとぎ】においてほとんど持っていないシキは自分の身さえ守っていればいいのだ。

「ラヴが絶対、狐を倒してあげる！！」

ラヴは俄然（がぜん）やる気を出し、いつになく燃えている。レンも覚悟を決めたのか、短く息を吐き軽く笑った。

「助けられるかは分かりませんが。やっぱり、ほっとくわけにはいきませんしね」

レンは銃に弾丸を詰め込み、ラヴは柔軟体操をしはじめた。案外この二人なら狐も目ではないかもしれないと、シキも若干思っていた。レンは常時ヘタレを携帯しているが、銃に関しては高度な能力を持っている。レンはシキの護衛も兼ねているので当然といえば当然なのだが。一方、リリィーは不安げな青い顔で三人を見つめていたが、やがて諦めたように溜息をついた。

「わかったわ。もともと私が頼んでしまったようなものだし。と

りあえず森の入り口にある小屋に行ってみて」

「小屋？」

「今、森はグライドルク政府に雇われた狼が取り締まっているから、そこで通行許可証を貰ってきて頂戴」

狼と聞き思い当たる節があった。嫌な節だ。

「灰狼（かいろう）団の連中か……」

灰狼団は世界をまたにかける非政府組織のことを指す。非政府、非営利を謳ってはいるが、金が絡んだ事件が後を絶たない胡散臭い組織である。

グライドルクも何故こんな奴等を雇ったんだろうか……。

「わかった。行ってくる」

だが、今はそんなことを言っている場合じゃない。とっとと仕事を片付けなくてはならない。

シキ達は宿が並んだ通りを抜けて、森の林に沿って歩いた。朝早いので森の木々の間から光が漏れていた。こうしてみると、本当にきれいな森だった。観光地になるのも頷ける。しかし、今では賞金

を狙った風流心の欠片もない連中しかこの美しい森を訪れていない。この森も、心なしか少し寂しそうに見えた。

そんな顔するなよ。すぐに元に戻してやるさ。

しばらくすると、小屋に着いた。小屋というよりは洞穴と言った方が良いかもしれない。数匹の狼が薄汚い毛布の上に伏せの状態でいた。灰狼団のトレードマークである、グレーにエンブレムのはいった小さな帽子に銀時計の首輪をつけている。首につけて時計が読めるのかと聞かれそうだが、彼らは器用に前足を手のように使う。だったらもう、二足歩行しろと言いたくなるが、狼としてのプライドなのか彼らは四足歩行を好む。狼は寝ているものもいれば、肉を食っているものもいる。シキとラヴは怖いもの知らずで、怯えるレンを尻目に、狼の群れに近づいて大きな声で言った。

「通行許可書をもらいたい」

肉を食っていた一匹の狼がギロリと目線をこっちに向けた。鋭い眼光に、今にも食らいつきそうな牙。片目には古傷があり、口からは先ほど食っていた肉の血の匂いがしてくる。レンがビクッと体をのけ反らせた。

以下、三人の視線のやり取り。

『（レン）めっちゃ怖いんですけどぉぉぉぉ！！』

『（シキ）うるさい。やるしかないだろ。ほら行けよ、お前が』

『（レン）いやいや。無理ですって。主もホントはびびってるんでしょっ！　怖いんでしょ！』

『（シキ）俺に怖いものはない。（シキ：小声）しかし、狼はちょっと怖いかもしれない』

『（レン）びびってんじゃねーか！！』

『（シキ）怖いと思うから怖いんだよ。ほら、あの大きなくりくりの瞳。愛らしいだろ。あんな可愛らしい瞳を持った動物が人を傷つけるのか。大らかな動物である象に似た大きな耳に、世の中の善も悪も全てを包み込む大きな手。完璧じゃん』

『そして、大きな口……。っておいいいいいい！！！！！　絶対やだっ。赤頭巾ちゃんはごめんだ！！』

『（ラヴ）じゃあ、ラヴが行くぞ』

『（レン）ちょっと、命を大切にしてくださいラヴ！！』

ラヴはレンの言葉も聞かず、にっこりと悪意なく笑って狼の前にしゃがんだ。

「聞こえなかったの？　通行許可証、下さいな」

狼は牙をしまうと、シキ達の方を見た。睨んではいなかったが呆れたような視線だった。

「こんなお嬢さんを連れて森へ行かれるおつもりですか？」

重厚感のある低音ボイスでの真っ当な質問である。このお嬢さんを生贄に君達を通そう、とか言われなくてよかったとレンとシキはホッとした。いくらシキでも、狼相手にいきなり啖呵は切れなかった。

うるさい。俺をあのヘタレ（レン）と一緒にすんじゃねーよ。ちょっとだ。ちょっと怖かったんだ。

とりあえず話の通じる相手とわかり、蛸が保護色に変色するような速さでシキはいつものふてぶてしい顔に戻った。

「人を見た目で判断するものじゃない。なんなら一戦交えてみるか？」

「主。ちょい声震えてます」

幸いシキの震えとレンの突っ込みは聞こえなかったのか、狼は鼻先で笑っただけだった。

「ご冗談を。わかりました、そこまで言われるならお通ししましょう。猫の手も借りたい緊急事態なわけですし。こちらに、お名前と住所などをご記入ください」

狼は洞穴の奥から用紙を持ってきた。レンがそれを受け取り、記入を始めた。もちろん書くのは偽名である。シキ達は一様、シリウスの代理できた身。そうやすやすと、本名を名乗りとエドヴァールと知れば賊に狙われる可能性だってある。シキは寝ている狼達を見回した。今いるのは六匹だが、空の毛布が五つ分ある。どうやら彼らが今森を調査しているらしい。

「いつから、調査をしているんだ？」

「二ヶ月前です。政府から人喰いの狐を調査せよと。まあ、神獣・霊獣・ドラゴン保護法がありますから、見つけるだけの仕事ですけどね」

保護法。その言葉を聞くのはこの街に着てから何度目だろう。法律を考えるのはエドヴァールの役目ではないが、王都へ帰ったら法律改正に手を出したほうが良いかもしれない。まあ、あのお堅い頭の老人どもがそう簡単に動いてくれるとは思えないが……。

「生活区域はどこまで絞れた？」

「南と東に巣はありませんでした。今わかっているのはそれくらいです。ここに来て二ヶ月になりますが、なかなか狐の尻尾を掴むのは大変そうです」

自嘲気味の笑みを浮かべ、狼はため息をついた。レンが記入を終えて紙を手渡した。シキ達は洞穴の隣にある、開けた獣道に入っていった。雪のせいで歩くとザクザクと音が立つ。小さい頃にこんな風にして遊んだな、とどうでもいいことも思い出した。しばらくは木の間から日の光が入ってきたが、今はもう枝が複雑に入り込み、雪も解けて、あるのは暗くうっそうとした空間と、たまにある水溜りしかない。白雪姫に出てくる悪い魔女がでてきそうだ。

「とりあえず、まっすぐ進んで北に行ってみるか」

「そうですね、まだ調べてないって言ってましたし。……にしても、気味の悪い森ですね」

「このあたりはもう観光地用に整備されてないからだろ。足、ぬかるんでるから気をつけ」

「ぬわわわぁぁぁぁ！！　底なし沼！！」

振り向くとラヴが、水溜りに溺れていた。どうやら、地盤がゆるいらしい。シキは氷山のブリザード並みの冷たい視線をラヴに送った。レンが手を出し、何とか救い出す。ラヴは涙目だった。

「こ、怖いぃぃぃ。家帰るぅぅぅっっ」

全身どろっどろだ。ブーツの中にも泥が入り、ラヴはブーツの紐を解き始め、泥を外に出し始めた。シキが、手で頭を掻く。

「ったく言わんこっちゃない」

レンが、なだめる様に肩を叩いた。シキは腕を組んで泥まみれのラヴを見ていると、ラヴはキッと目を釣らせてシキを見た。どうやら心配も慰めもしてもらえなかったので怒っているらしい。そして、シキへと反撃を始めた。どろっどろのまま、シキの足に抱きついてきたのだ。

「抱きつくな！　泥がつくだろ。ちょっと、聞いてんのか！！」

「シキの馬鹿！！」

「はぁぁ！？　その言葉そっくりそのまま返してやるっ」

「馬鹿ぁぁ！！！」

「わかったから、離せ！！　何か臭い。土臭い！！」

そんなやり取りをしていると、森の奥から、二人組みの若い男が飛び出してきた。何日もこの森で狐を探していたのか、頬がこけていた。二人は血相を変えて猛牛のような勢いでこちらへ走ってきた。息は絶え絶えで、今にも卒倒しそうである。

「た、助けてくれ！！」

一人の男がガバッとレンの肩をつかんだ。レンは事態が飲み込めず、おろおろしながら尋ねた。

「どうしたんですか！？」

続けてシキが聞いた。

「狐が出たのか！？」

男は早口で言った。

「いいや、熊だ。熊。おっかねえ馬鹿でかい熊だよ！」

「熊？　わかった取り合えずあんた達は早く小屋に戻って灰狼団にそのことを伝えて来い」

「でも、あんたらは！？」

「他にも熊に狙われる奴らがいるかもしれない。熊を追いかける」

嫌な予感が頭をよぎる。この辺りにいる熊は、性質（たち）が悪い。一度暴れだすと、何か喰うまで止まらない。

ったく、シリウスの奴。熊が出るならそう言えっての。

イライラさながら、シキが男たちの導火線に火をつけた。

「いいから、早くしろ！」

「は、はい」

弾かれるように男たちは走り出し、すぐに林の奥へと消えていった。シキは周りの林を見渡した。不自然に動く葉は見当たらない。

「近くにいるか？」

神経を尖らせて、辺りをうかがう。周りの草木が揺れている。ざわざわとした感覚が肌をなぞる。薄気味悪い林が、ついに正体を現したようなそんな感じだった。

「わかりません」

レンは銃を胸の位置まで持って、シキ達をかばう様に前に立ち、辺りをうかがった。ラヴが鼻をくんくんとさせた。

「いる。臭いはしないが、音がする」

「音？　お前耳も良いのか？」

「だんだん近づいてくるのがわかる」

ラヴは目を閉じて、唇を真一文に結び、しばらく呼吸も止めて集中していた。やがて、小さな声で言った。

「十四時の方向。まだラヴ達を伺ってるだけだ」

レンが二人をかばいながら、十四時の方向に動き、銃口を林の中に向けた。いつものレンとは違う、狩人の目だった。

「僕が銃でしとめます。倒せるかはわかりませんが、目を狙えば逃げられます」

「撃っちゃ駄目だ、レン」

当たり前のことのように、さらりとラヴが言った。シキは、そう言うと思った、と呟いた。レンは眉をひそめる。

「は？　何言ってるんですか。撃たなきゃやられるだけですよ」

「その熊が悪い奴と決まったわけじゃない」

ラヴは、食い下がる。シキは頭が痛いとばかりに額をさする。レンは小声で叫んだ。

「悪い奴も何も、じゃれ付かれること自体がこっちからしたら命の危機でしょ！」

レンはラヴを説得しようとしたが、シキはもうこの栗毛を放置しておくことにした。

こういう奴は、何を言っても利かない。

シキは心の中で呟いた。

こういう奴、つまりは、わがままで、横暴、そして……。

「〜〜っ。駄目なものは駄目だ！　ラヴが話をつけてくる」

「話ぃぃ！？　熊と喋るつもりなんですか！？」

そして、馬鹿だ。

ラヴが熊に近づこうと一歩を踏み出す。シキとレンは仕方がなく、ラヴと一緒に一歩熊がいるだろう位置へと近づいた。途端に十四時の方向の葉が揺れる。その振動がどんどん近づいてくる。

覚悟を決めるしかないか……。

３ｍをゆうに超える、大きな体格に毛むくじゃらの大きな塊。鋭い目つきが、こちらを捕らえた。熊だ。グライドルクに生存する、コンティオと呼ばれる品種。いたって凶暴で、硬い鍵爪を持つ。今はまだ、こちらを伺っているようで、５ｍほどの距離を保ったまま動こうとしない。ラヴは怯えずに堂々と熊へ語りかけた。

「ラヴ達はお前の敵じゃない。すぐに森の奥へ帰れ！！」

どうだ？　うまくいくか？

コンティオはその凶暴さゆえに生態に関してはあまり調べられていない。人語をしゃべれるという学者もいれば、そうでないと主張する学者もいる。シキ達は前者の可能性を信じて、はたから見れば、すごく馬鹿な真似をしている。熊は首をかしげる動作を見せた。どうやら、通じていないらしい……。シキとレンはいろんな意味で覚悟を決めた。熊は、首を元の位置に戻すと急に雄叫びを上げた。耳がキーンとして思わず目をぎゅっと瞑ってしまうような、空気を振るわせる咆哮だ。それから、一気にこちらの方へ走ってきた。

「ほら言わんこっちゃない！」

シキ達は熊と逆方向に韋駄天の如く走った。熊はブルドーザーのように追いかけてくる。

「あはは～。話が通じなかったね～」

ラヴはウサギのようにぴょんぴょん跳ねながら、申し訳なさそうな態度ひとつせず言った。

こいつ、やっぱり捨てる……。

シキがそんな風に考えていると、同じくレンも怒っていた。

「ってそんなこと言ってる場合かぁぁぁ！　誰のせいだと思ってるんですか、ラヴ！！」

レンと違い、ラヴの指導をあきらめ放棄したシキは、次の一手を考えていた。とりあえず、今必要なのは確実な生存方法である。ラヴを捨てるのは後からでも良い。

「ごちゃごちゃ騒ぐな。とりあえず、洞穴でもなんでも良い、身を潜められそうな場所を見つけろ」

「左に曲がって、走れ。エンジュの木の近くに洞穴がある」

聞き覚えのない声がシキの耳に入ってきた。他の2人も同じように頭の中にハテナが浮かんだ。後ろからの声だったので、3人は振り向いた。レンの口から思わず声が漏れた。

「何でこんなところに……」

金色の毛色にうすい水色の瞳。九つに分かれた尻尾と中型車ほどの大きな胴体。シキは目を丸くし、思わず立ち止まってしまいそうになった。

「化け狐……！！」

「いいから走れ。死にたくなかったらな」

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊

遭遇王子（後書き）

ヨーグルトが体に良いって言うけど実際何で出来てるのかよく知らない

ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）

お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

金色の髪を揺らし、狐はシキ達と併走しながらそう告げた。しかし、とにかく今は逃げるのが先。

「緊急事態だ。レン、ラヴ、こいつの言った通りに動くぞ」

二人は頷いた。速度を落とさず、左に曲がりエンジュの木の近くにある穴に入った。三人は転がり込むようにその中に入り、後に続いて狐も穴の中に入った。洞穴の中は満員電車の中のようになって一気にきつくなった。

「き、きついんだけど」

ラヴが狐の尾の辺りで呼吸しずらそうにしていた。尾の毛が顔を覆ってしまっている。

「ああ、すまない」

それに気づいた狐は尾を動かした。シキ達は息を殺して、コンティオが来るのを待った。すると、咆哮をあげながらコンティオはシキたちの近くにやってくる。しばらく辺りをうろついたが、どうやら頭に血がのぼってこちらに気づくかなかったのか、走り去っていった。それを確認してからシキ達はそろそろと洞窟から這い出した。服についた汚れを払いながらレンが言った。

「まずいですね、アレは相当荒れてますよ。すぐほかの旅人にも教えないと……」

シキはレンの言葉にうなずきながらも、狐の方を振り向いた。それに気づいた狐は嘲笑うように唇を吊り上げた。立派な八重歯がこちらをのぞく。

「結果としては、貴様らを助けてやったのに。礼も無しか」

シキは狐に対しての警戒を解かず、厳しい目で狐を睨んだ。

何を考えている？

シキの疑問はそこだった。人食いの化け狐が、人を助けた。

「なぜ、こんな真似を？　あんたは旅人を餌にする化け狐だって聞いてるんだけど」

「化け狐、ねぇ。貴様たちは私を狩りにきた者か」

「食物連鎖だ。弱いものを強いものに食われる。俺らはあんたを喰いにきたんだよ」

挑戦的にシキはそう言った。狐は面白いと言い、少し考えてから答えた。

「残念だが、旅人を捕食しているのは私ではない。食ってるのはあの熊どもだ。私の領域を勝手に荒らして迷惑してる、だから痛めつけた、それだけだ。貴様達を助けに入ったわけではない」

「待て、今なんと言った？」

化け狐が、人を食ってない？

確かに化け狐に食われかけたという人間はいない。全員死んでいるからだ。見かけた者の話も、どこか頼りないものばかりだった。しかし、その事実はあまりにも疑問符がつきすぎる。

「騎士団の監視がついて迷惑していたんだよ。調べてみると私が

人を食ったことになっていてな。二十年くらい前にも同じことがあったから、すぐにピンときた。まあ、保護法とやらのおかげで私に手は出せなかったようだが、見られているというのも気分がよくないからな。逃げてやった。」

あっさりとした口調で狐はそう告げた。世界一の水準を誇るグライドルク騎士団からの監視をこの狐はほんの気まぐれで抜け出してきたと言った。

化け物だな。

そう言いつつも、シキは素直に感心もした。

「そしたら、自分の罪状が増えていたと。すごいじゃないか。あんたは今、二十余名を食ったことになってる」

「全て、あの野蛮な奴等(くま)のせいだ。ついには、政府も動き出して狐狩りだ。難儀な話だが、人間如きに私をどうこうとはできないさ」

レンが、口を挟む。

「じゃあ、リリィーの妹は狐ではなく、あの熊に殺されたってことですか？」

シキは腕を組み、考える素振りを見せた。

「状況を見るにそうだろうな。なんで人喰いがこの狐と誤認されているのかはわからないままだが」

リリィーの妹は、あの熊の手にかかって死んだ。しかし、村人はみなそろって狐を犯人だと誤解している。その差異はいったいどこで生まれてしまったのだろうか。

「わかるか？」

シキは狐に尋ねたが、狐は首を横に振るだけだった。それもそうだ、メリットなんてない。狐だろうが熊だろうが、危険なものに違いない。藍の雪丘（ブルーリフレックス）の観光客は激減するだろうし、街から離れる人もいるかもしれない。それとも、単に逃げ出した狐が藍の雪丘（ブルーリフレックス）にいるというだけで騎士団が原因を無理に結びつけただけだろうか。

レンがシキの耳元でささやいた。

「どうしますか、主」

「様子を見るしかないだろう。あの狐を信じるにはまだ証拠が不十分だが、今すぐ動くのもよくない。とりあえず、暴走した熊を殲滅するのが先だ」

「えっ！？」

「手土産なしに戻れない。リリィーにああ言った手前、帰るわけには行かないだろ」

「ラヴもそれに賛成！　狐さんは良い人だよ。ラヴが尻尾どけて、って言ったらどけてくれたもん。シキだったら絶対そんなこと言わないよ」

ラヴは悪意なくシキの悪口を言ってのけた。シキはこめかみをピクピクとさせながらも何も言わなかった。狐は目を丸くした。自分が良い人と呼ばれたのに驚いたのかもしれない。

「あんたも、付き合えよ。狐さんよ」

「何故私が人間など共に」

狐は小馬鹿にするように笑ったが、シキは笑わなかった。

「実は俺達は、騎士団の人間に雇われてきたんだよ。騎士団はあんたを見失ったものの、それを政府に言えば、こちらが恥をかく。そんな自分のプライドが邪魔して公に捜査できないから、代役ってことでな」

いつの国も騎士団と政府は仲が悪い。騎士団は政府に弱みを握られまいとし、政府は騎士団の地位向上を避けるため、必死で彼らの

汚点を探している。

くだらない世界だ。

しかし、自分が生きる世界である。だったら自分はその世界で上手に出来たお人形を演じるしかないのだ。

「なるほど。つまり、熊退治に手を貸せば貴様から騎士団に私を監視しないように手配する、ということか」

「流石、話の飲み込みが早い。どうだ悪い話じゃないだろ？　あんたの余生は俺が保障してやるよ」

狐は目を閉じ少し考えたが、やがて頷いた。

「いいだろう。貴様の言い分、騙されたと思って飲んでみるのも悪くない」

シキは唇を吊り上げ、にやりと笑った。

「決まりだな」

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：

約定王子（後書き）

１０回クイズで“ひじ”のことを思いっきり“かかと！”って言いました
もう天使のお迎えが近いようです
ＵＺＵです（・―・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。―人―。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊

シキ達は熊を追って森の中を歩いた。もちろん勘を頼りに歩いているわけではない。ラヴの鼻のよさを使うのだ。

「にしても、すごいですねラヴ。一度しか嗅いでない匂いなのに、よくわかりますね」

「くさかったからな」

ラヴは鼻をくんくんさせながら先頭を歩く。

「くさい？　においが強いって意味か？」

野生動物なのだから人間に比べてにおいは強いのかもしれない。しかし、今この森には野生動物なんて砂漠の砂のような数存在して

いるはずだ。

「うん。あの熊。熊のにおいがしなかったの。匂いがしない。全く、全然なーんにもしない。」

「ああ、それならば私も感じた。あの熊、何かおかしい」

「何かって何がだよ？」

「知らん。捕まえてみればわかるだろうが、逃げ足が速くてな」

匂いか……。匂いを消す魔法がないわけではない。追っ手から逃れるための手段として用いられることもしばしばだ。しかし、なかなか高度な魔法で使える人は少ない。もっと手軽に使うのならば、消去粉（ディス）という粉末を自分にかけるという方法もある。その辺の露店でお手軽に手に入るリーズナブルな品だ。しかし、だとしたら何故、野生の熊が消去粉（ディス）を使う？まず彼らのメリットがわからない。というか思い返せばわからないことばかりだ。

狐と熊の誤認。

匂いのしない野生の熊。

この二点は恐らく何かで繋がっている。何者かの意図があるとしか思えない。

そんな風にシキが思いつめていると、ラヴが声を発した。

「近い。すぐ近くにいる」

シキが目を凝らすと、確かにいた。あちらはまだ気づいていないようだが、木と木の間からかすかだか熊の巨体が見える。

「とりあえず、近くの木陰に隠れて伺いましょう」

シキ達は木の陰に体を隠すように隠れた。狐は伏せのような格好で背の高い草からそっと目だけをのぞかせた。木が少し開けたところにコンティオはいた。先ほどとは違い、二頭もいる。子供がキャンディをなめるようにもうとっくに食い終わった人骨を何度も何度も舐めていた。その姿はシキ達に戦慄を覚えさせるには十二分な代物だった。あの骨の原型と元あった位置、そしてその持ち主の末路がありありと目に浮かんだ。

世の中は弱肉強食。

そうはいうけれど、やはり見ていて気持ちのいいものではない。

「貴様達の中で一番強いのは誰だ？」

狐が小声でたずねてきた。ラヴは少女。シキは腕っ節は強いものの、所詮は人間である。武器もなしにあの巨体とはやりあえない。

「となると、僕ですかね」

レンはコートから、愛用している銃を取り出す。藍色の光沢のかかった銃で代々受け継がれている年代ものらしい。

「レン、へまするなよ……」

「心配要りませんよ」

レンは能天気に笑った。シキとラヴは顔には出さないものの不安気な気持ちが現れていた。

「私の後に続け」

狐はそういうと、草むらから飛び出した。すぐに気づいた熊が骨を投げ捨て狐のほうに向かってきた。どうやら体当たりをするつもりらしい。しかし、迫りくる熊を前にしても狐はスピードを落とさない、それどころか加速していく。

「おいおい、大丈夫かよ……」

ぶつかると思ったそのとき、狐は天高く飛び上がった。あの加速は、そのための助走だったのだろう。狐は熊二頭分を小鹿のように

軽やかに飛び越えた。しかし、体当たりの体勢だった熊は止まれず
そのまま前へと進む。そして、そこには銃を構えたレンがいる。

「！！！！！！」

銃に気づいた熊は爪を地面にこすりつけ急ブレーキを試みたが

「もう遅い！！」

火薬のはぜる音が二発すると、あたりは静かになった。横たわる
のは、二頭の熊である。

「危なかったですね」

すんでのところで熊の体当たりにぶつからずにすんだレンは一人
そうつぶやき、冷や汗をぬぐった。

「レン！！　平気かー！！」

慌ててラヴがレンの元に駆けて行く。シキは熊に近寄りその姿を
まじかで見ていると、大きくため息をつき、汗をぬぐう動作をした。

「ったく、てこずらせやがって」

「いや、何であんたが殺ったみたいに言ってんですか！！」

レンの叱責が飛ぶ。しかし、シキには聞こえていない。

「馬鹿。主役は俺だ。何でお前がこんなかっこいい事してるんだよ。代われよ。銃もってやっつけるとか何？　目立ちたいの？　主役狙ってるの？」

「なにこの人、めっちゃ妬いてる！　自分にバトルシーンないからって妬いてる！！」

「うるせーな。妬いてねーよ。憎んでるんだよ」

「もっと深い妬みになってんじゃないですか！！」

「思ってねーよ。死ねばいいのになんて思ってねーよ」

「思ってたよね！　今の言葉僕忘れませよ！！」

三人でそんないつも通りの言い争いをしていると、狐が呆れ顔で言った。

「そんなことより、早くこの熊を調べるぞ」

「あ、ああ。分かってるよ」

シキはそういうと熊の近くにしゃがみこみ、ゴワゴワとした毛に触れた。長さは3？ほどで茶褐色だったり、灰色だったりしている。となりにラヴもしゃがみこみ、鼻をクンクンさせた。

「やっぱり匂いがしない」

「そうか……」

毛の表面をさすっているとシキはあることに気がついた。シキは不敵に笑った。

「おいおい、とんでもないことになったぞ」

レンがシキの手元を覗き込みと、顔色が一気に白くなっていった。

「そんな、馬鹿な。だいたい大きさからして、ぜんぜん違うじゃないですか」

「ったく、お前は何にも知らないんだな。こいつらの本当の大きさはこの二倍だ。いつもは省エネにしてるだけだ。それに四足歩行は苦じゃないとも聞くしな」

シキは熊の皮をグッとつかんだ。そして、体と皮を引きちぎるようにして思いっきり引っ張った。すると見えてきたのは熊の筋肉でも骨でも器官でもない。

「狼……」

狐は目の前のものが信じられないと言わんばかりの表情だった。

「だって、こいつらが派遣されてきた理由は人喰いが発生したからだろう？　なのになぜこんなことに」

狼は、皮を貫通した弾丸に当たり二頭とも事切れていた。うつろな瞳は虚空を声なく見つめ、四肢はダラリとしたまま動かない。皮は上手く本物の熊をつなぎ合わせてある作り物で、そこに消去粉（ディス）がかけられていたのだろう。そのため、匂いが感じ取れなかったのだ。

「こいつらは、ずっと前からこの森に生息していたんじゃないか？　そしてあるとき、人の肉の味を覚えてしまったとか」

「しかし、都合よく政府から派遣なんてされますかね？　だって政府だって彼らが犯人って可能性も考えたでしょ？」

レンは首をひねる。シキは黙ったまま頭の中を整理した。

匂いのしない熊。これは解決された。熊は何とか人肉にありつこうとした狼の策だった。

狐と熊（狼）の誤認。これも解決といって差し支えないはずだ。

狼は狐に人食いの罪をなすりつけようとした。狼がわざわざ熊に化けたのは万が一、捕食の時を見られた場合の保険だったのだろう。狐狩りの名を熊狩りに変えるだけで、狼が疑われることはない。

そしてここで、新たな疑問である。なぜ、狼が政府の命でここにいるのか。

待てよ。いや、待て待て……。

ああ、そういうことか。頭の中がクリアになっていく感覚が体中に走った。何で気がつかなかったのだろうか。おかしかったじゃないか。はじめっから。狼がここにいるはずがないじゃないか。重大な矛盾が生じていた。騎士団は、狐が逃げ出したことを政府に報告していない。なのに狼は自分達は“政府から”頼まれてやってきた、と言ったのだ。その時点でもう矛盾していたじゃないか。

「狼は自分達が政府から依頼されたと嘘をつき、この森への侵入を制限する権限を得た」

レンも言葉を継ぎ足す。

「そうすれば、捕食の場面を街の人に見られる可能性は消える。なおかつ、街を守っているというイメージもついて待遇もいいでしょうね」

シキの鼓動は一気に早まった。一刻も早くこの事実を街に伝えなくては……。

「証拠は掴んだ。この事実を早く街の人間に伝えるぞ」

「それは無理だな。やっこさんに気づかれた」

狐が言った。ラヴは険しい表情で辺りを見回した。
ったく、せっかく真相が分かったってのに。
シキは地団駄を踏む気持ちで立ち上がり、神経をあたりに集中させた。草木がざわざわと不規則に動き、獣の吐息が聞こえてくる。

「その秘密。知られたからには生きて返すわけにはいきませんね」

声の主は、先ほどシキ達を案内した狼だった。周りには四五頭の狼を伏兵のように引き連れている。

「さてさて」

狼はニタリと笑う。

その笑い方はチョコレートに蜂蜜をぶっ掛けたような、くどくて嫌悪感を抱く笑みだった。

「誰からいただきましょうか？」

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊

虚飾王子（後書き）

押入れから埃まみれの残念なキッコロが見つかりました
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

神口王子

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊

狼達に囲まれたシキ達は背中を合わせるようにして、狼と向かい合っていた。リーダー格と思わしき狼が、一歩前に出てきて続けた。

「いやはや、私達のところまでたどり着いたのはあなた方が初めてですよ」

レンは銃口を狼にむけた。

「人食いについて、否定はしないわけですか？」

狼は鼻で笑う。

「ええ。こうしてこの森は私達だけの狩場となりました。おかげ

さまで平和な日々を過ごしてこれただけに、この事態は誠に残念です。でも、貴方達が悪いんですよ。何も知らなければこんなことには」

狼はそのような戯言を続けた。狼が人を捕食する。それは裏じゃたまに聞く話だった。政府からの報酬で身寄りのない子供を買って食うらしい。都市伝説みたいな話なので、シキは信じていなかったが。

趣味のいいことだな、ホント。

「ま、お話をしたって無駄ですね。どうせすぐに死んでしまうのですから！！」

そう言って、狼達が一気に襲い掛かる。シキはラヴをかばう様に抱きとめ、シキに襲い掛かる狼をレンが狙撃した。返り血がシキの背中にべっとりと付く。

おいおい、これはいわゆる、久しぶりのピンチじゃねーか？

残る狼は四匹。狐は三匹を相手に応戦し、レンはすばしっこく動く残りの一匹に何度も弾を撃ち込んでいる。要するに今、二人を狙っている敵はいない。弾丸を撃つ手を止めずにレンが叫んだ。

「主、ラヴ！　早く逃げてください。僕もすぐに行きます！！」

自分とラヴが足手まといなのはシキにも重々承知だった。シキはラヴの方へ顔を向けた。

「おい、走れるか？」

「……」

ラヴは、黙って狼のほうを見ていた。焦点が合っていない。ただその狼からの溢れる血飛沫を恍惚とも崇拝とも取れるような表情で見ていた。

「ラヴ？」

シキはもう一度尋ねた。されど答えはない。嫌な感じがした。それは恐怖に近いものだった。あるはずのものがないような、欠落したような恐怖だった。

「……」

「おい、ラヴ！　しっかりしろ！！」

シキはラヴの肩をゆすった。返事はない。完全に自分の世界に入り込んでしまっている。

どうする……。

ラヴは相変わらず、楽しそうに戦闘を凝視している。サーカスのパフォーマンスを見るような視線だが、そこにいつものラヴの笑顔はなかった。しかし、そこでさらなる問題が発生した。

「逃がしはしないぞ、人間」

シキ達のすぐ真後ろに十数匹の狼がいた。どうやら、先ほどのどれかの狼が呼んだのだろう。

マジかよ！！

シキはラヴのほうを見た。狼が出現したにもかかわらず、レン達の方から目をそらそうとしない。

どうする……。

幸いなことに、狼どもは油断しているのか省エネモードだ。魔法が使えないとはいえ、何とかラヴが逃げる時間くらいなら稼げるかもしれない。しかし、今のこいつじゃ無理だ。完全に気がいってる。二人で逃げ出す方法を考えなくてはならない。

「殺せぇぇぇ！！！！」

一匹の狼の叫びを合図に一斉に他の狼達がシキとラヴめがけて飛んでくる。シキはラヴをかばいながらも、ギュッと目を閉じた。

死ぬ……！！

一秒が過ぎ、また一秒が過ぎた。シキは目を開いた。自分には傷一つついていない。

あれ？　何でだ？

ハッとラヴが見えないことに気がついた。

「ラヴ！！」

かばっていたはずのラヴがシキの腕から消えている。慌てて周りを見ると、ラヴがいた。血を流し死んでいるわけでも、狼に食われているわけでもない。

「まさか……」

ラヴは何か枷が外れたような、シキが知らないラヴになっていた。目が血走り、体中が血まみれだ。それでも表情一つ変えずに、襲い掛かる獣を体一つで殺していった。殺戮というよりも、虐殺だ。足蹴りで首を折り、手で四肢を砕く。背中に爪が突き立ってもすぐに

それを引き剥がし、首をありえない角度に缶ジュースの缶を開けるような手軽さでやってのけた。それでも、そんなことを上回る恐怖をシキは感じた。背中に虫が這うような嫌悪感。胃酸が燃えるようにキリキリと胃を焼いた。　痛みと叫びと血の匂いで辺りは充満した。

何なんだよ。これは。

やがてラヴは襲い掛かってきた狼すべてを殲滅した。レンや狐は以前戦いを続けており、こちらの様子には全く気付いていない。ラヴは最後の狼の顎を砕き、シキの方見た。落ち窪み充血した目がシキを捉えた。

「ラヴ！！」

シキはラヴのその悲痛な姿に、胸が締め付けられた。こらえきれなくなり、思わず声を発してしまった。ラヴは口をゆっくりと動かした。いつも聞いているラヴの声ではない。まるで別人のしっとりとしていて、甘美な声であった。

「お前は神に会わなければならない」

「神？」

意味が分からない。何を言っている？

「お前をここで死なせるわけにはいかない」

シキは大きく目を見開いた。

神。

世界広しと言えど、この無数に存在し、天使も悪魔もドラゴンも犬も猫もいる世界の中、たった一つ存在が確認されていないものがある。それが神だ。そう言い残し、ラヴはその場に崩れ落ちるように倒れた。シキは、しばらくフリーズしたままだったが、すぐにラヴの元に駆けつけた。

「ラヴ！　しっかりしろ！！」

ラヴは目を閉じたまま動かない。

「ラヴ！！」

自分の心臓の鼓動が聞こえてくる。最悪の状況が頭をよぎる。

目を覚ませ。頼む……！

「んんー？　な、何？」

ラヴが目を開けた。シキはほっとして大きくその場でため息をついた。

「あれ？　私何してたっけ？　んー熊さんが狼さんで。ん～あれれ？」

先ほどのことは覚えていないらしい。

まあ、そちらの方が良いか……。

シキは今はあえて言及するのをやめた。最優先すべきことは他にある。

「あーもう！　話は後からする。今は逃げるのが先だ。走るぞ！」

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：
；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；
＊◆◇

神口王子（後書き）

高速の料金所で働いてる人はどうやってそこまで行くのだろうかＵＺＵです（・－・＊）♪
神口とは神様のお告げのことを言います（＊。▽。）ノ

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

追惜王子

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

シキとラヴは命からがら、何とか街までたどり着いた。昼なので、そこらじゅうの店は開いている。

「どうする？」

「旅人を探せ。賞金稼ぎに助けを求めよう」

シキはその辺にいた、体躯の良い男数人に声をかけた。顔に傷があったりして、目つきが悪い。この場にレンがいれば声をかけようとするシキを全力で止めるくらいの強面（こわもて）だ。しかし、シキは目を潤ませ、両手を祈るように組み合わせながら切実そうに言った。

「旅にお方。僕の仲間が森で熊に襲われているのです。今すぐ助けてくださいませんか」

目の前のステーキに夢中だった男達は、食事の邪魔をするなと怖い顔でシキを睨んだ。しかし、シキの子犬のような憂いを帯びた表情を見て、ガラリと態度が変わった。シキは続ける。

「僕と彼女だけは逃げろって。で、でも！　仲間にもしものことがあったら！！」

シキはひざをかくんと折り曲げ、その場にしゃがみこみ両手で顔を覆った。やり過ぎない程度に肩を振るわせる。すると、それを見た男達は顔を見合わせ、こくりとうなずき、立ち上がって拳を振り上げた。

「よおぉぉし！！！！　ものども、この少年を救おうじゃないかっ。行(ゆ)くぞ！！！」

一人の男の声を皮切りに、銃や物々しい武器を担いだ男が一斉に駆け出した。シキ達は先導するため、急いで列の先頭へ回った。無論、もうそのときのシキの顔は干からびたようないつもの無表情に戻っていた。

「仲間はどこにいる！？」

走りながら、リーダーらしき人物が尋ねた。シキも走りながら、

それに答える。

「こっちだ。でも、狐は攻撃するな」

「何ぃ！？　どういうことだ？」

大きな剣を背中に持った他の男が訊ねた。シキは大きな木の幹を飛び超えた。

「話している暇はない。しかし、見れば分かる」

レン達の元にたどり着く。男達はその光景に唖然としていた。

「灰狼団の連中が……」

「何てこった。俺達は踊らされてたのか……」

「まさか、あの狐が」

「ボォっとしてないで、さっさと倒せ！！」

突っ立ったままの男達にシキは鞭のように言葉を浴びせる。男達は事情こそ飲み込めないが、とりあえず大声を上げながら狼へと向かっていった。

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

決着はすぐについた。生け捕りにされた狼の残党は騎士団の手によって全て法廷の下で裁かれることとなった。シキ達はひとまず、リリィーのいる宿屋の食堂で遅い昼ごはんを食べていた。食堂の窓から見える街の様子は、騎士団の人間や事態を知り慌てた様子の住民が右往左往していた。とりあえず、リリィーに事態を伝えなくてはいけないと思い、騎士団の事情聴取が終わってからすぐに宿屋に来た。だが、リリィーはここにいなかった

「レン、狐はあれからどうしたんだ？」

レンと狐と先ほどの男達は残りの灰狼団の連中を生け捕りにして、騎士団へ引き渡した。騎士団は任意の事情聴取を狐に要求したが、当然狐は断った。『人間どもに話すことなどない』だそうだ。騎士団も無理強いは出来ないので、折れた。

「森へ帰ったと思います。傷の手当てをしたほうが良いと言ったんですけど、ほっとけば治ると言ってました」

「ったく。意地張りやがる」

シキはフォークで肉を突き刺し口へ運ぶ。リリィーはどんな表情をするだろうか、と考える。

犯人が狐だろうが狼だろうが、妹が帰って来るわけじゃない。

シキは肉を飲み込み、頬杖をついた。結局、誰が犯人か何てどうでもいい。被害者が加害者の死刑を望むのは、一種の復讐心からくるものなのかもしれない。では、それが終わったら被害者はどう生きていくのだろか。

自殺してしまうのではないだろうか。

何となくだが、そう思った。

憎む者も愛する者も失ったら、人は生きていけない。

ラヴは三杯目のコンソメスープを飲み終えた。

「まさかな……」

リリィーはそんな薄弱な精神の持ち主じゃない。シキは四杯目を注ぎに行こうとするラヴの足に軽くキックを入れてとめた。

「うぎゃっ！！」

俺としたことが考察が過ぎた。
なぜならその言葉はまるまる自分に返ってくる。
復讐を終えて、愛する者を失ったのは他でもないこの自分だ。

「あっ、シキさん！！」

リリィーが裏口から入ってきたのか、厨房の方から顔を出してきた。茶色い紙袋の中には何やら料理の材料が入っているようだ。

「狐の話聞きました」

そういうと彼女は紙袋を厨房の棚の上に置き、シキ達と向かい合うように椅子に座った。

「何だか、みんなはびっくりしてますけど、私はほっとしてます。やっと、妹のお墓に良い報告が出来ます……」

リリィーは表情こそ晴れ晴れとしているが、目には涙がたまっていた。自分達の無力さを感じた。結局自分達がどう動いても、彼女の笑顔はもう拝めはしない。愛する者が帰ってくることはもうない。

彼女の妹の骨は見つからなかったという。羽織っていた血のついたのカーディガンは森の入り口に落ちていた。だがその奥へ捜しに行くのは危険と判断され、それ以上の捜索はされなかったそうだ。彼女はこれから骨も灰もない、空っぽの墓に祈りを捧げるのだ。

「僕らも、一緒に行かせてもらえませんか？」

レンは控えめな口調で言った。リリィーは少し笑って頷いてみせた。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊

墓は街の教会の裏に並んでいた。街中の人間が衝撃的なニュースに夢中だからか、人はシキ達を除いて誰もいなかった。ざっと見、三十ほどの墓がある。真新しい白い大理石のものが狼によって殺された被害者のものだろう。リリィーは墓石の前にしゃがみこみ、祈りを捧げる。シキ達もそれに習う。

「

月よ、彼女を照らしたまえ。

光よ、彼女を照らしたまえ。
天への道に迷うことなく、進みたまえ。
我の御霊は彼女と共にある。
我の御霊はそれを信じる。
」

【おとぎ】の別れの挨拶だ。地方によりアレンジが加わるが、大体はこんな感じだ。

天への道に迷うことなく、か……。

その言葉はひどく滑稽に感じた。天国なんて存在していないのに、人はそれを願ってやまない。別に悪いとは思わない。人は何かに縋(すが)らなければ生きてはいけないのだ。

「おい」

聞いたことのある声がした。シキは振り向いた。

「森に帰ったんじゃなかったのか」

狐がいた。耳を噛まれたのか、少し血が出ている。リリィーは青い顔をして後ずさった。

「大丈夫。話は聞いただろ」

「う、うん。大丈夫。ちょっとびっくりしただけ」

リリィーはそうは言いながらも、シキの後ろで不安げにしていた。ラヴが訊ねた。

「何かあったの？」

「いや、そう言うわけではない。とにかく、ついて来い」

狐は相手の反応も見ずに、背中を向けて歩き始めた。シキは迷わずそれについていった。三人もそれに続いた。狐は人目につかないよう、人気のない道を歩いた。森に入り、観光地用に整備された道を行く。やがて開けた土地に入り、大きな木の下へついた。日の光が木の葉にあたり、下に立つと光が瞬く星のように感じられた。穏やかで、時が緩やかに流れている。そんな場所だった。

「ここに、少女を埋めた」

狐はそう言って木の根元あたりを顎で指した。リリィーは信じられないと、目を大きく開いた。

「妹を埋めてくれたの？」

狐は無表情なまま、肯定した。

「私が捕食している狼を見つけた。別にお前の妹を助けたわけではないが、狼をけちらした。ただ、見つけた時にはもうほとんど息はしていなかった。うわ言のように姉を呼んでいた」

「……！！！」

リリィーはそれを聞くと、木の根元に倒れこむように座りこんだ。頭を地面につけて、手の指が地面の土を少しえぐった。

「ごめんね、ごめんね。私、貴方を助けられなかった」

細い肩が震えていた。ラヴは悲痛そうな顔で、何も言わずリリィーの横に座って背中をさすっていた。その背中は誰かに重なって見えた。愛する者を失った人間は脆い。誰かが支えなければ、すぐに壊れる。ガラスよりも脆く、雲の形のように不安定だ。

「謝らなくて良い」

シキは、口を開いた。リリィーは泣きはらした顔をこちらに向けた。

「ちゃんと、お前は妹に会いに来たんだ」

俺とは違う。逃げた、俺と彼女は違う。

「だから、泣かなくても良い」

嗚呼、そうか。

重なって見えた姿は自分だったのか。

◆◇＊‥；；；‥＊◆◇＊‥；；；‥＊◆◇＊‥；；；‥＊◆◇＊‥；；；‥＊◆◇＊‥
；；；‥＊◆◇＊‥；；；‥＊◆◇＊‥；；；‥＊◆◇＊‥；；；‥
＊◆◇

追悼王子（後書き）

動物って意外と目が怖い
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

「いや～。僕が頼んだのは狐のコトだよ。何でこんな風になったのかな？」

シリウスはニコニコしながらも、どこか棘のある言い方をした。

「いいだろ。あっちは“おまけ”に過ぎないんだ。本当の依頼はちゃんとこなしたさ」

シキは無表情なまま、紅茶を飲み干した。ここは、王都にあるシリウスの別邸である。大きさはシキの邸宅より少し小さいだけでとても立派な屋敷だ。今二人は、食事を取っていた。夜のディナーというわけである。あの事件の終息から二日。一様、依頼主の元へシキは参上した。だが、その結果はシリウスには芳しくないものであった。

「確かに騎士団は、灰狼団と仲が悪かったから壊滅できて嬉しいかもしれない。けど、僕は違う。僕のお友達が困ったことになってるんだよ」

お友達とは、非合法ギルドの連中のことだろう。

もともと灰狼団も非合法ギルドの生まれだったが、その力を買われ政府に拾われた。ようするに成り上がったわけである。非合法組織から政府の役人へ。その背徳とも取れる行為は一時はギルドから非難を浴びた。そのため灰狼団はギルドからの報復を恐れ、自分達の資金をギルドに納めるようになった。それからは非難も消え、ギルドもシリウスのようなパトロンと灰狼団という二つを柱に、資金面において大きな問題を抱えずにすんでいた。

ようするにシキは柱の一本をへし折り、シリウスを窮地に陥れたわけである。

「良い機会だし、パトロンを引退したらどうだ？」

シキは相も変わらず無表情なままだった。シリウスは苛立ちを露にした。

「馬鹿を言うな。君こそ、どう責任取るつもりだい？　頭を下げるじゃ済まされないよ」

かつては将軍と奉られた人間がいうとなかなか、迫力がある。シキは立場もわきまえずそんなことを思った。

「でも、もう一つの依頼はちゃんとこなしたと言っただろう？」

「宿屋のことか。あんなもの所詮は小物に過ぎない」

宿屋とはリリィーが働いていたところである。シキは言葉の後半は無視をし、口元を楽しそうに歪めた。

「しかし、賭博に薬物たあ。驚いたね」

あの宿屋の裏では賭博や薬物などの犯罪の温床となる行為が行われていた。最近ではその宿屋の主人であるロビンを中心とした組織が立ち上がり始め、違法武器の輸入や買占めなど、シリウスがパトロンを務めるギルドの目の上のこぶとなっていた。シキはその宿屋に潜伏し、その実態を調査するという仕事もシリウスから預かっていたのだった。

「でも良いわけ？　君の話が本当なら、そのリリィーって子も僕らからお咎めがあるかもしれないよ」

リリィーも宿屋の使用人。もちろん一連のことは把握していただ

ろう。

「知るか。田舎かぶれの娘がどうなろうと俺の知ったことではない。煮るなり焼くなり好きにすれば良い」

シリウスは肉を切り分けながら、わざとらしく口笛を吹いた。

「相変わらずの悪っぷりだね～。わかったよ。じゃ、今からでもギルドを向かわせて潰しに行かせるとするよ」

そういってチラリとシキを盗み見たが、相変わらずシキは余裕たっぷりの表情だった。慌てたそぶりは何もない。それどころか、こんなことを言い始めた。

「話を戻すが、今お前が経営しているギルドの資金が足りないという話。俺にも責任があるんだ。解決してやろう」

「俺にも、って言い方やめてほしいね。全部君の責任だろ」

「俺が資金援助をしてやろう」

「……！！」

シリウスは思わずフォークに刺したレタスを食器の上に落とした。

「嘘だろ。君、ギルドに資金を出すって意味わかってるの？」

それはつまり、社会の裏側に顔を出すということになる。エドヴァールは貴族の中の貴族。かつては王族からもっとも信頼と寵愛を受けてもいた。確かにシリウスの行為は政府、王都共に黙認されているとはいえ、このような行動に出ればかならず波紋が及ぶ。表にしろ裏にしろ、良くない波が立つに違いない。

「手足は多い方が良い。千手観音は知ってるか？　あ、知ってるわけないか」

シリウスは、食べるのをやめてシキの方を見た。怒っているわけではないが、その瞳は万物さえも見透かしそうな凍った湖のようなだった。

「確かに、僕らはビジネスな関係だ。しかし、僕は君を友達だとも思っている。下手をしたら、死ぬだけじゃ済まされない。君の家族も、君の名誉も危険な目にあう」

シキはデザートに出されたシフォンケーキを切り分け、口の中に入れた。

「大丈夫、大丈夫。俺はそんなところじゃ、死んでも死にきれんよ」

「でも……。そうまでして、君は何をしたいんだ？」

「捜したい人が出来た」

「捜す？　誰を？」

シキはシフォンケーキを平らげ、満足そうに笑った。

「神様」

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇

「ラヴー！！！」

翌日。シキの家。つまりは、いつものお屋敷に三人は帰っていた。レンはいつも通り役に立たない料理人の代わりに我が儘な主人のためチョコレート菓子を作り、役に立たない庭師の代わりに花壇の整備をしていた。

「何度言ったら分かるんですか！　花壇に突っ込まないでください！！」

巨大な獅子のような体に、触ってくださいといわんばかりのフサフサな長い毛。ラヴの背丈の１．５倍はある大きさのケロベロス（ちなみに名前はコタローである）の背に乗って、ラヴはレンに叱られていた。コタローはシキ（本物）の生誕祝いにとある世界から送られた番犬みたいなものである。しかし、如何せん人懐っこく番犬の役割は一切なしておらず、ただのペットとなっている。シキはもともと動物に対して興味がなく、いつも外でほぼ放し飼いの状態だったが、ラヴが来て以来毎日のように遊んでいる。

「ごめん、ごめん。でも、わざとじゃないんだよ。ねー♪」

「ガルルルルルー♪」

コタローもラヴも反省の色は一向にない。すっかり仲良しになったようだ。

嬉しいような、悩みの種が増えたような……。

レンは頭をかかえて、もういいですと力なく言った。

「ちょっと、お二人。シキ様はどこにいますの？」

高飛車そうな声がした。誰だろうか？　二人は何事かと声のほうへ視線を向けた。

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

二階の書斎で、シキは仕事に追われていた。シキは地球や宇宙が存在する世界と【おとぎ】とを仲介するという仕事ももっている。ようするに大使といえば分かりやすいかもしれない。普通の世界に【おとぎ】の悪魔やらが入り込まないように見張ったり、無用な混乱を避けるため必要以上の人間に他の世界の存在を知られないようにする仕事だ。そのため、ＵＦＯやＵＭＡなどという他の世界の物が写真に映り込んだりしたら一大事。

「ああ、リックか。あの子鬼（ゴブリン）の件はどうなった。目撃者は金を積むなり何なりして黙らせたか？　おいおい。しっかりしてくれ。またオーケアニスともめるのは御免だぞ」

シキは舌打ちしながら古めかしい装飾の入った電話を切った。ここ最近はずっと寝ていない。まるで、苦しめるかのように仕事が次から次へと入ってくるのだ。イライラしてはいけないと分かっていても、庭のほうからラヴやレンの叫び声が聞こえてくると、貧乏ゆすりが始まってしまう。

ぽろっぽー。ぽろっぽー。

間の抜けた声が窓の外からしてきた。シキは何だろうかと思いながら、窓を開けるとブリキで出来た鳩がおいてあった。この場合は置いてあったというよりは、転送されてきたと言ったほうがいいかもしれない。

「あのジジィか。はっ。粋な演出してくれるじゃないか」

世界と世界は扉でつながっている。だから移動をするにはゴキブリのような魔方陣を使えるものの力が必要だ。しかし、それ以外にも世界間を行き来する方法はある。もちろん、並大抵の魔方陣使いには出来ない。こんなことをしてのけるのは、あの狸くらいだ。

シキはブリキの缶を開く。小さな紙が入っている。それを開き読む。中身は、まあ予想通りな感じだった。

シキさんへ

どうしてもお手紙が書きたかったのでおじい様に無理を言って手紙を出させていただきました。

私の務めていた宿であのようなことがあったとは未だに信じられません。

ですがシキさんが機転を利かせ、私を貴方のおじい様のところ

へ連れて行ってもらったことにはとても感謝しています。
妹のこともです。
私は全て無くしました。私には親もいないので文字どおり仕事も家族も失いました。
けれども、私には妹の言葉があります。
思い出に縋るのではなく、前を向いていきます。
私は、まだギルドから仲間と勘違いをされ狙われている身。
またいつ会い出来るかわかりませんが、お礼だけ言っておきます。

リリィー・E・Rより

シキは相変わらずの無表情で窓辺に立って空を眺めた。
愛する者も憎む者もいなくなったら、人は死んでしまう。
だけど、案外人間はもっと図太く、無慈悲な生き物かもしれない。
それが悪いとは言わないけど。
思い出にしがみつくのは滑稽だ。
別れ話を持ちかけられたときに「愛してるといったじゃないか！」と叫ぶくらいに。
ソレハ　カコ　ノ　ハナシ　デス。

愛するものの死さえも人は糧にし乗り越えていく。

「ま、頑張れ」

届くわけもないのに、シキはそうつぶやくいた。

にしてもだ。

先ほどから何かを忘れているような気がしてならない。すごく大事なことではなった気がするが、何かを忘れている。

「シキ様ぁぁぁぁぁ！！！！」

背中に猛烈なタックルを食らった。かわす間もない。すばらしい攻撃だ。

「！　クレデシア！」

嫌な汗が額から出てきた。

まずい。まずいぞ。

そういえば、俺この娘に暴言を吐いた気がする。何のフォローもいれずにそのまま仕事に出かけたため、完全に放置して忘却の彼方だった。

こいつは、俺よりも位が上。もしも親に言いつけられでもしたら、築き上げてきた地位が水の泡だ。

「クレデシア様、その。先日はご無礼をしまして」

「クレデシア様なんて、やめてください」

クレデシアは頬を赤くしてそういった。

ん？

頬を赤くする？

なぜだ。見ると、ラヴとレンが書斎の扉の辺りに立っていた。二人は呆れたというか、もうどうでもいいという表情でうなずいた。

「主が彼女に暴言をはいたことで、クレデシアさまは……。Mに目覚めてしまったようです」

M？

Mって何だっけ。えっと、確か……。

「もっと、強く呼んで！　いや、怒鳴って下さいませ！」

「嘘おおおおおおお！！！！！」

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：

◇◆⁎

模索王子（後書き）

動物園で一番リアルを感じるのはオウムなどの小屋に入り込み餌をかっさらう雀の勇姿を見たときです
ＵＺＵです（・―・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。―人―。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

序曲王子

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

「僕等は手をつないで生まれてきたんだ」

どちらが言ったのだろうか。覚えてはいないけど、僕等は本気でそう思っていた。僕等はこの広い宇宙の中でたった二人の家族だった。

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

毎日毎日ドブ川のような路地裏で、か細く僕達は生きていた。生きているのか死んでいるのかも、よく分からない。理解できるのは何も入っていない胃が苦しそうに叫ぶ痛みと、自分の体を濡らす雨だった。約十年前のことだ、地球や宇宙は未曾有の危機に襲われた。

太陽の活動が弱まり、銀河系の軸がぶれ始めたのだ。

火星や月に住んでいた人間も、何が起こるかわからない緊急事態というわけで、政府の命令により、ほとんどの人が地球に戻ってきた。しかし、地球が安全だったわけではない。もちろんシェルターやら食糧の備蓄は最も整っていたが、地球がこの大変動の影響を受けないというわけではない。予定通りといえば予定通りに地球は危機に直面した。

予測不能のハリケーンや、あらゆる災害やウイルスが宇宙中で発生した。どこにも逃げ場はなかった。ただ人々は、家にこもり居もしない神に祈りを捧げる毎日だったという。人類は出来る限りの策を尽くしたが、それは子豚の作った藁の家のようになぎ倒された。

宇宙の人口は半分になった。

太平洋側の国はほぼ全滅となり、生き残った人間のほとんどは地球の北国の者だった。都市部の再生には時間がかかり、アメリカは今も壊滅状態である。だがヨーロッパと月の一部地域は何とか、教育設備が整うまでに回復した。しかしそんなのは全体の十％にも満たない。そして僕達はその外側の住民だった。僕達は北国に虫けら同然のように生息していた。寂れた街の路地裏が僕とレイルの住処だった。屋根のある家はない。僕達は五、六歳にして孤児、いわゆるストリートチルドレンと呼ばれるものであった。

「レイル、今日は雨が降りそうだね」

レイルは、残飯を漁る手を止めて、空を見た。どんよりとした鼠色が空を覆っていた。

「困ったな……」

レイルは濃い赤色の髪に、赤い瞳を持っていた。いつも無愛想で、口数は少ない。しかし、同時にお人好しでもあった。命懸けで盗んできた食べ物でも、その辺のやせ細った犬や鳥を見ると、ためらわず自分の分の食べ物を与えた。

「行くところがないのかい？」

そんなときだった。

僕らの前に救いの手が差し伸べられた。

僕らはその手を掴んだ。

幸せを知らない僕達は幸せが壊れてしまうことを知らなかった。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇

序曲王子（後書き）

ＦＦ１３をいまだにクリアできません
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

夜宴王子（前書き）

シキの視点に切り替わります

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇

嫌な夢を見た。

「レイル……」

枕に頭を乗せたまま、無意識のうちに俺は手を天井へと伸ばし虚空を掴んでいた。ラヴが放った合言葉が頭をよぎる。

【君がレイルを殺したんだ】

そう。俺があいつを死なせた。一日たりとも忘れたことはない。俺の家族。

「……なーんてな」

ハッといつもの自分に戻ってきた。らしくもなく、色々考えてしまったようだ。夢は見るもんじゃないな、と思いながら俺は適当に着替えて一回のダイニングへ行った。

◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊：；；；；：＊◆◇＊

「これを食えと？」

俺は不機嫌だった。この温厚で誰にでも優しく、兎のような純粋無垢な俺が怒るのだからよっぽどのことが起きたのだ。この娘。俺の大事なチョコレートをものすごく可哀想なチョコレートパイにしやがったのだ。

「シキ、シキ！　見てこれ。おいしそうでしょ。レンに教えてもらったの！」

エドヴァール家の昼食の中でこれほど不気味なものが食卓に並んだことはなかったに違いない。シキはレンを親の仇のように鋭く睨んだ。

「どういう風に教えたら、これが出来るんだよ！」

「僕はちゃんとレシピを渡しましたよっ。ラヴ、これ通りやりましたよね？」

「うん！」

「「……」」

俺もレンももう何も言わなかった。

チョコレートパイは文字通りの黒こげ。まあ、それなら分かる。失敗は誰にでもある。それを許すくらいの度量は俺にはある。しかし、何をどおすればチョコレートパイを黒こげにし、なおかつ無数の赤や紫の斑点や蛍光っぽいピンクの液体を出現させられるんだろうか。

「いやぁ。手品師もびっくり！　みたいな感じですね」

「びっくりしすぎて、気絶しそうだよ。レン君。どうすんだよこれ。劇物っていうレベルじゃないぞ。見た目に殺傷能力があるよ、これ」

「もう、二人で何分けわかんないこと言ってるの？　ほら、シキあーん」

ラヴはうれしそうにフォークでチョコレートパイ（なのかこれ？）をさし、俺の口元に持ってくる。俺は口を真一文にしばる。死んでも食うか。ていうか食ったら死ぬ！　最悪の危機を脱するため仕方なく俺は両手を上げて降参のポーズをとった。

「よし。お前の気持ちは良く分かった。けど今はチョコレートパイを食べたい気分じゃないから、あの犬にでもやってこい」

「えええ！！　ひどいよっ」

『このひとでなし！』『薄情者！』とラヴは半泣きの表情でそう訴える。

「……わかった、わかったから喚くなうるさい。じゃあこうしよう。仕事が一段落したら俺と一緒に菓子を作る。そんでもってそれを食べる。それでいいな？」

ラヴは嵐が去った後の太陽のようにニッコリと笑った。気性の激しい女はこれだから苦手なのだ。

「ほんとに！？　忘れちゃ駄目だよっ。絶対だよっ」

「わかったから早くそれを処分、じゃなくてコタローにあげて来い」

「うん♪」

ラヴは皿を持ってドタバタと下へ駆け下りていった。ああ、やっと開放された。俺は肩の荷が下りた気持ちになった。一方レンは俺の隣に立ったまま、似合わない真剣な面持ちで言った。

「ラヴのことを、調査してまいりました」

俺はラヴのいなくなった椅子をチラリと一瞥した。

「で、どうだった？　何か埃は出たか？」

「全く。収穫ゼロです。でも、恐らく彼女は【おとぎ】の人間でも宇宙の人間でもないでしょうね。主が言っていた、驚異的な運動能力に血走った目。今のところ適合する世界も種族もありません」

「そうか」

あの能力。叩けば何か出ると思って調査してみたが、どうやら一筋縄ではいかないらしい。結局あれ以来、奴に変わった点はない。いたって普通（というには少し無理があるが）の娘だ。

「それより、主。【おとぎ】に言った際、この様なものを渡され

まして」

レンは高級そうな紙で出来た招待状を取り出した。送り主の欄には王族専用の豪奢な印が押されていた。内容は近く、城で行われる五年に一度の建国パーティーの知らせだった。中には鷲の形をかたどった、いくつかのブローチも入っている。どうやら招待客はそれをつけて出席しなければならないらしい。

「祭り騒ぎは苦手だ。なんとか断れないのか？」

もともとエドヴァールは行事に積極的に参加しない影の貴族として有名だ。それにシキが本当は【おとぎ】の人間ではなく、魔力を持たないことが判明したら一大事である。

「無理ですよ。姉上に絶対に主をこれに参加させて、といわれましたから」

レンの家計は代々長男がエドヴァールの従者となるのが慣わし。レンの姉は現在、次期【おとぎ】の王となるミース王子の世話係をやってる。しかし、この女がまた恐ろしい活火山のような奴なのだ。男に振られるとやけ酒を浴びるように飲み、朝まで人を連れまわす。世話係だけでなく王城護衛部隊総隊長でもある彼女に逆らえるものはいない。俺でさえも、ぶっちゃけ怖い。めっちゃ怖い。

「よし、参加しよう」

「助かります」

まだ死ぬには若すぎる。

「でも、何でそこまでして俺を出席させたいんだ？　あの人も俺の事情は知ってるだろ？」

「ええ、何でもエドヴァール家の人間が代々行う行事があるとか」

「行事？」

「さあ。僕も建国パーティに参加したことはありませんから、よくは分かりません」

なんだか嫌な予感が頭をよぎる。灰色の雲が心を満たすようだ。

「とりあえず、お前はついて来い」

俺はブローチをレンに投げた。レンはそれをキャッチした。

「ラヴはどうしますか？」

「置いていくに決まってるだろ。アイツを連れて行ったら面倒なことになる」

「わ〜。カッコいいブローチだね！」

ラヴはいつの間にかシキのすぐ近くに立っていた。楽しそうに並べられたブローチを手にとって見ている。

「お前は留守番だ！」

「やだ！　絶対に行くっ」

ラヴはブローチをひとつ掴むと部屋から早足で逃げ出した。

「待て！　レン、追うぞ」

「あ、はい！」

そして、この鬼ごっこはケイトの怒りの叱責が飛ぶまでしばらく続いた。そして何だかんだでラヴの同行が決まった。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇

「時間はまだ余裕がありますね」

「少し早くつくかもな」

俺達は【おとぎ】の王都に来ていた。繁華街には人が賑わい、王都の生誕を祝う旗が至る店に飾られていた。道行く人の中には顔に王都の紋章である鷲を描き酒を浴びて歌を歌っている。俺達はそれを馬車の小窓から見ていた。

「わぁぁ！！　すごい楽しそう♪　お祭りみたい！！」

ラヴは遊園地に来た子どものようにはしゃいでいる。あまりにも駄々をごねるので結局俺が根負けをし今の経緯にいたっているわけだが、まあ、喜んでいるのだから良しとしよう。

「いや、主も丸くなりましたね」

レンは腹が立つニヤニヤとした粘着質な笑みを見せる。俺は露骨に嫌な顔をしてそれをスルーした。

馬車の小窓に目を向ける。人々のはじける笑顔が街中に溢れていた。その中で俺は男を見つけた。それなりの店で買われただろう質の良い服に寝癖がついたままの髪。年は三十代くらいだろうか。赤

と青のオッドアイが神秘的でピエロのようだ。

しかし、俺が一番驚いたのはそこではない。男は無銭飲食でもしたのか、店先で店主と言い争っていた。質の良い服を着ているのに無銭飲食。そのアンバランスに俺は疑問を持った。しかし、そうは言っても他人だ。助けてやる筋合いもなければ、互いの名さえ知らない。俺は視線を他に移そうとした。しかし、そのとき男の胸の辺りに光るものを見つけた。

「あのブローチは！！」

男の胸にはシキと同じ鷲のブローチがついている。ということはあの男、王城に呼ばれた招待客だ。これは不味い。王城に呼ばれるということは国が認めた素晴らしい人物ということだ。そんな奴が無銭飲食。これは王の威厳にも由々しき事態だ。他人だ何だといっていられない。

「馬車を止めろ！」

「え！？　どうしたんですか、主？」

レンの叫び声を無視して、急いで馬車を降りて男の元へ行く。ピザ屋の前に男はいた。ピザ屋の親父と犬の喧嘩のように言い争っている。

「金払えって言ってんだろうが！」

「だーかーらっ。財布を忘れたんですってば。すぐ取りに行きますから！」

男は紺色のジャケットに黒とオレンジのストライプの入ったシャツ。頭には小さめの薔薇柄シルクハットを乗せている。ますます、変な奴だ。レンが俺の耳元で囁く。

「主、あの方の胸元にあるのは……」

「ブローチだ。間違いない」

男達の言い争いは続いた。

「じゃあ住所を教えろ！」

「ローイングハイツ通り、西王都銀行右横――――――――」

「お前みたいな奴がそんな高級住宅街に住んでるわけねぇだろうが！！」

「だーかーらっ。本当なんですってば」

先ほどからこのエンドレスである。俺は二人の間に入るように立

つ。ピザ屋の店主は何事だと俺のほうを見た。

「貴族のお坊ちゃんかい？　どっかで見た顔だな」

俺は笑顔の仮面を瞬間接着剤を使って貼り付ける。

「エドヴァールの者です。店主殿。どうかこの方を許してはいただけませんか？　代金のほうは僕が払います。どうかここは寛容なお心を」

店主の手に迷惑料を握らせる。すると店主はすぐに顔色を変えた。

「いやいや、エドヴァール様にこう言われたら俺も諦めるとするか。おい、二度と俺の店に来るんじゃねーぞ！」

店主は店の中に消えていった。俺は一息つくと無銭飲食男の方を振り返る。男は反省した色は一切なく、この世は楽しいことしかないような笑顔を俺に向けた。

「どなたか存じませんが、ありがとうございます～。助かりました☆」

何かイラッとするな。☆のせいか？　兎に角、男は俺が嫌いなタイプに該当するであろうことは間違いなかった。俺は手早く済ませ

ようと適当に自己紹介をした。

「そうですか～。エドヴァール家の☆」

「あんたの名前は？」

「いや～。名乗るほどのものでは☆」

「そういう意味じゃねーよ！　何、おちょくってんのか手前ぇ！！」

「ははは～☆　愉快な方ですね」

すっげームカつく☆

「……もういい。とりあえず、馬車に乗れ。王城に向かうぞ」

何だかんだで、俺達は王城へ向かう。これから起こる事件のことなんて当然予測していなかった。

◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇＊：；；；：＊◆◇

夜宴王子（後書き）

愛知県ってカンガルーの形に似てる……
ＵＺＵです（・－・＊）♪

感想やアドバイスをお待ちしています（。－人－。）
お気軽にどうぞ（，∀、）ノ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9974p/

極悪王子

2011年4月2日13時47分発行